
クマリ～生神～ 邂逅する星の宿命

世喜こうじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クマリ〜生神〜 邂逅する星の宿命

【Nコード】

N6033Q

【作者名】

世喜こうじ

【あらすじ】

寡黙な高天俊の高校に、美しい兄妹・和矢と美矢が転校してくる。ある秘密ゆえに人を遠ざけがちな俊だったが、とある事件で彼らと親しくなる。怜悧な俊に淡い想いを抱き始める美矢、そしてその姿を見守る和矢だったが……。

序

「ねえ、ちょっとイケテナイ？」

特に大声というわけではない、むしろ小さな、抑えた声音であった。

耳に届いたのは、その声が、明らかに年齢を重ねた女性のもの、であったから。

「オボーさんにしとくの、もったいないわねえ」

別の、同年代の女性の声が後に続く。

今度は、いくらか年相応な言葉に思え、私は通路の角を曲がるのに合わせ、さりげなく声のほうに眼を送る。

容貌からは年齢は察しづらい東洋人の女性数人が、私に携帯電話機を向けている。

どうやら、いわゆる『写メ』という物で撮影しているようである。

……構内は撮影禁止となっているのだが。

『……日本語の表示も必要だろうだ』

ひとりごちて、不快感を隠し、そ知らぬ顔で一団から遠ざかっていく。

『師様、なぜ、日本人と？観光客は皆同じような服装をしておりますし。最近では、韓国や中国の人も、お金持ちのようですよ』

まだ、入門して日の浅い、童子といってよい弟子が、こらえきれずに聞いてくる。

『アディット、黙りなさい。師様に対して、礼を失した物言いですよ。口を慎みなさい』

別の、年長の弟子が年若の彼をたしなめる。

思わず言を発した私が原因ではある。

振り返り、顔を赤くして恥じ入るような、泣きそうな顔つきの童子の頭を、私はそつとなでる。

『興味を持つ事は、学ぶ上で大切な事だ。同じように礼節を重んじる事も。兄たちはお前にそのことを教えたのだ。心にとめておきなさい』

『……はい、師様』

私に慰められた事で、逆に緊張の糸が切れたのか、童子の両の目から、ぽろぽろと涙がこぼれる。

『シータラ、アディットと一緒に、先達をしておくれ』

今から行く先は宿坊であり、先達は必要ない。

早く部屋に戻り、落ち着くまで見てやれ、ということだ。

中堅の弟子であるシータラは、しかし気働きのできる少年であり、心得顔でうなずき、アディットを促し、足早に去っていく。

『師様……、差し出がましいようですが、アディットにもう少し厳しく注意されるべきかと……』

宿坊の私室に入り、部外者がいないのを見計らい、タージが苦言を呈する。

『私達も同じ過ちをいたしました。師様は私達にも同じように諭されてきました。けれど、あの者は兄弟子達から何度も同じ叱責を受けているのに、直そうという気配がありません』

『そうだね。本当に賢いものは、逆鱗に触れる前に、学ぶものだよ。あの子も、中々に好奇心旺盛で、才気はあるのだが……もう少し、賢ければ、日本語も教えようと考えていたのだがね』

『……奥付きに、と？』

『日本語にこんな慣用句がある。〈ことわざ〉というのだよ。へ仏

の顔も三度まで。我が国発祥の神は、本当に日本の生活に根付いているのだよ』

『…………アディットは、対外的なことに興味がありますので、例えばシャンティ師のもとで観光用の祭事を学ばせたら良いですね。師様』

『そうだね。才気煥発で、なかなかかわいらしいからね。きっとお気に召されることだろう』

一番弟子の提案に満足して、私はうなずいた。

その「仏のような」慈悲深い笑顔の下にある非情さを、彼が承知している事も、私は知っていた。

近いうちに、理由を付けて他の師へ預けるつもり…………そんな私の意を汲み取り、速やかに解答を導き出す。

才あるだけの者は、無用だ。

特に早熟な者は才気走って、要らぬ詮索をし、思わぬ災いと呼び込む。

要るのは、思慮深さと慎重さ、そして幾らかの、頭脳。

それだけあれば、後は経験が何とかしてくれよう。

それで、『私の弟子』は、勤まる。

だから、まわりからは、私の下には『思慮深いが、特に目立った才がない』凡庸な者ばかり集まっていると思われている。

それでよい。

『能ある鷹は爪を隠す』

そんな日本語が思い浮かぶのは、主人と共に日常会話まで日本語を習得した賜物だろうか。

主人…………我が君を守るために、必要な人材を秘かに育ててきた。

慈悲深く、清廉で、教義に通じ、かつて神童と呼ばれた程の、けれど権力欲も政治的手腕もない、『学者馬鹿』な師。

その元で、出世街道からは遠ざかった、思慮深さが唯一の取り柄

のような、慎ましくも凡庸な弟子たち。

……そんな石ころの中に、金剛石を隠していることを、浅はかな者たちは気づきもしない。

やたらに自らの輝きを見せびらかす者は、煌めいているように見えても、良くて水晶、多くは脆い雲母ばかりだ。

どれほどきらびやかに輝いていようと、そんな脆く弱い石は無用。

むしろ、いらぬ敵を呼び込みかねない。

我が君は慈悲深い。

弱いものが身近にあれば、その腕に抱き、雛を守る母鳥のように、守ろうとなさるであろう。

それが、あの方の本能。

だからこそ。

あの方を、そんな卑小な者で煩わせることはできない。

あの方が、どれほど偉大であっても、その手で守りきるには、この世は、あまりにも広すぎる。

あの方の傍に、必要なのは……強き者。

この世界の、調和を維持していくために……。

『失礼致します。スラージュ師。大師様からの使者がおいでにございます』

タージが房の外から呼びかけてきた。

『広間にてお待ちいただいております』

『分かった。今しばらくお待ちいただくように』

大師様からの使者、ということとは、即ち、我が君が呼びになっているということである。

火急のお呼び出しである……日没になれば、わざわざ使者を立てて呼ばぬとも、毎夕伺うことを、我が君も大師様も十分に分かっていらっしやるのだから。

身支度を整えて、私は広間に向かい、歩き出した。

……そこで知らされるであろう、事態に、思いを馳せながら。

第1章 麗しき転校生

1

連休明けの、さわやかな5月の朝。

校庭や体育館のあちらこちらから、朝練の生徒達の、賑やかな声が鳴り響いている。

県立石町原高等学校。

昨年創立80周年を迎えた、伝統ある進学校である。

文武両道の誉れも高く、運動部、文化部とも活動が盛んで、野球部の金属バットの音や、サッカー部のホイッスルの音に混じって、吹奏楽部の重厚な楽器の響きが、離れの練習室から聞こえてくる。

8時をまわった今の時間、生徒用昇降口に入っていくのは、朝練のない部活の生徒か、帰宅部の生徒くらいである。

高天俊は前者である。

彼の所属する美術部が朝活動するのは、文化祭前くらいで、それも1日2日程度であった。

おかげで、電車通学の俊は、ほぼ毎朝、この時間に昇降口に足を踏み入れることになっている。

「オッハヨー！」

能天気な挨拶と共に、この時間にこの場所にいないはずの、友人の姿を見て、俊は顔をしかめる。

「何やってんだ……その格好で」

「見りゃわかるだろ？ サッカー部のユニフォーム」

少年は、新品ではないが、洗ったばかりの青いユニフォームを着ている。

右胸の所に『ISI・F・C』と刺繍で縫いとりがある。

「……俺は、何の格好かじゃなく、何のためか聞いているんだけど」

「勧誘に決まってるだろ」

……誰を、と言う疑問を口にする前に、答えに思い当たり、無視することに決める。

「おいおい！シカトすんな！誰のために朝練早く切り上げて待ってたと思うんだよ」

「頼んでない。それに、サッカー部は新入生だけで2チーム作れるほど入ったんだろう。今更……」

「残念！連休中の練習で3分の1になりました。……まあ、毎年の事だよ」

インターハイ出場歴もある石町原高校サッカー部は、県内でも有数の強豪だが、その分練習もキツイ。

同じく強豪の野球部を大きく引き離して、新入生人気No. 1の運動部である。

ちなみに文化部No. 1は吹奏楽部であり……俊が所属している美術部は、マイナーであったりする。

「うちは、今年新入部員が2人なんだ」

「ふーん」

「今全部で7人。それで、3年生2人が引退したら、ギリギリ5人だ。1人でも減ったら、同好会に格下げだ」

「へえ、大変だな」

「じゃあ、そういうわけだから」

教室に向かって回れ右した俊の肩を、友人——吉村正彦よしもとまさひこがグイッと掴む。

「まだ話の途中！」

「……離せ」

パシッ、と正彦の手を払いのけて、俊は振り向きもせずに再び歩き出す。

「ちえっ、また逃げられたか」

科白ほどは残念そうでもない様子で、正彦は俊とは逆方向の、部室棟に向かって早足で歩き出した。

「……よくやるよな、吉村も」

その光景を見ていた男子生徒の1人が、別の男子生徒に話しかけた。

「高天って、そんなにサッカー上手いっけ？」

「さあ？あんまり印象にないなあ。だいたい、アイツって何でも適当に、それなりにこなしてるからなあ」

可もなく不可もなく、何でもある程度は上手くこなす……それが、周囲の人間が俊に抱く感想。

そして、もう1つ。

「でも、よくあんな風に面と向かって喋れるよな」

「うん。俺、肩をつかんで引き留めるなんて、怖くて出来ねーよ。目があっただけでフリーズしそうなのに睨まれたら、と思うだけで背筋が寒くなる」

……決して素行が悪いわけではない、品行方正とまではいかないが、ごくごく普通に高校生活を送っているはずなのに。

氷の視線を持つ男。

ひと昔前の映画のタイトルのような通り名を、俊自身は知らない。誰も怖くて、俊に話しかけることができないのだ。

正彦を含む、一部の仲のいい友人達を除いて。

正彦は、俊と同じ中学から進学してきた。

他にも同じ中学の生徒はいるが、親しく話すのは正彦くらいである。

正彦に言わせれば、俊は一番の友人で、俊にとってもそう、つまり親友同士なのだ。

その親友との会話が、前述のように、非常にそっけないもので……聞き様によっては、仲たがいしているようにも聞こえるが、日常的にあのように会話しているわけで。

俊にとっては、軽口を叩いているつもりなのだが、周囲はそう取

らない。

他の人間に対する俊の会話内容は、「はい」「いや」「ああ」……という短い言葉である。

表情に乏しい俊が、ぼそっと短く言葉を紡ぐだけで、怖い、という印象を与えがちなのに、よく喋る正彦に対してさえ、笑顔一つ見せず、平坦な口調で話す様子は、威圧感があり、ますます周囲の人間を寄せ付けなくしている。

良くも悪くも感情を表すことがない俊は、それなりに整った顔立ちをしている分、余計に冷たく見える。

影で学校を仕切っている……なんて噂さえ流れた、本人は知らないが。

そんな俊に対して、飽きもせずサッカー部の勧誘を続け、クラスが違うのに、昼休みは一緒に昼食を摂り、暇があれば相手の教室で（主に正彦が押し掛けている）喋っている正彦は、俊と対照的な、まだ少年、といった雰囲気を持ち主である。

2年生ながら、すでにサッカー部でレギュラー入りして、次期エースと目されている。

明るく、人当たりも良く、ひょうきんな面もあって、上から可愛がられ下から慕われ、男女ともに受けが良い。

俊と正彦の関係は、石町原高校7不思議のひとつ、とさえ言われるほど、信じられないものなのだ……周囲にとっては。けれど。

正彦は俊を大切な友達と思っているし、俊もまた然り（一見そうは見えないのだけど）。

「そーいやさあ、どっかのクラスに転校生くるかも、みたいだぞ？部の連中が言ってた。連休前に手続きに来てんの見たって」

制服に着替えた正彦は、昇降口でふられたことを全く気にせず、自分の教室に行くより先に俊のクラスに顔を出して、一方的におしゃべりを始める。

「そう」

冷淡なようだが、俊としてはごく普通に相槌を打つ。

「中途半端な時期だよな。しかも2人だって。多分兄妹じゃないかって。男と女」

「よく見てるな」

「しかも、日本人じゃないかも、だってよ。なんかアジアかアラブっぽい感じだって」

「日本もアジアだろ」

「だーかーらー、こう、彫が深くて、肌もかなり茶っこかったんだって」

「……ホントによく見てるな」

「それも、かなり美人だってさ、女の方」

「あ、そう」

「もー、感動うすいなー！一応美術部だろ？もっところ、感性のキラメキというか、ゲイジュツテキ興味とか、ないわけ？」

「……静物専門だから」

「セイブツなら、人間も入るだろ？って、そりゃ生物か！ははっ」

「……チャイム鳴るぞ」

周囲の人間に、初夏の日差しを撥ね返すような寒々しい空気を残して、本人は何も気がつかない様子で、教室に帰っていく。

内容は違えども、ほぼ毎日、正彦と俊の間で繰り広げられる光景である。

さて。

俊の指摘通り、じきに始業のチャイムが鳴り響いたが、担任は姿を見せなかった。

クラスの中がざわめき始め、日直が様子を見てくるからと、着席を促した頃、やっと、担任が姿を現した。

1人ではなかった。

「静かに」

さらに大きくざわめく生徒たちに、担任が注意を促す。

「転校生を紹介する」

「はじめまして。遠野和矢^{とおのかずや}と申します。今日からこの学校で、皆さんと一緒に学ばせていただくことになりました。よろしく願います」

シン、と一斉に静まり返った教室に、予想外に流暢な言葉が響く……その名前もまた驚きだった。

一見すると、日本人ではないと思われた。

彫りの深い、端正な顔立ちは、その褐色の肌と相まって、エキゾチックで日本人離れした美しさだった。

濃い睫毛に縁取られた目元は、今は緊張の為か、愁いをおびたように伏せ目がちで、そこはかとなく色香さえ感じる。

上背もあり、おそらく180を越えているだろう、スナナリしていて、けれどひ弱さは感じられない。

今、教室にいる男子と比べても体格のよい方に部類されるだろう

……けれど、イメージは、華。

きらびやかで、匂い立つような、大輪の薔薇。

赤……ピンク……もっと清楚な感じ……雪のように清らかな白い薔薇。

そのイメージに、俊は心の中で苦笑する。

男に対する科白じゃないな。

本人に言ったら殴られそうだ。

「そうね。白い薔薇って、意外とあってるかも」

放課後、美術部の活動場所である美術室で、イーゼルや画材の整理をしながら、部員で同級生の三上加奈^{みかみな}が言った。

「華やかなんだけど、けばけばしい感じじゃなくて、もっと控え目……って言うのは違うかなー、存在感が有るのに、アクは強くない」

て、でも、印象的で……」

適当な言葉が思いつかず、唸っている姿も愛らしい、なかなかの美少女である。

ちよつときつめなところが、一部男子に絶大な人気がある、という噂だが、俊にとっては気の合う友人の一人であることの方が、重要であった。

2年目になってもなかなか打ち解けてくれないクラスメートの中で、加奈だけは最初から気負わず話しかけてきて、すぐに意気投合した。

俊自身は特別他者を拒んでいるつもりはないが、だからと言って、自分から積極的に親しくする気は毛頭ない。

幼い頃から一線を画される対応に慣れているため、特にそのことで、孤独を感じたり悲観したり、ということはなく、むしろ、人間関係が複雑になる方が、煩わしいとさえ感じていた。

相手から俊に近づいてきた場合でも、感情表現が希薄な俊の反応に気が削がれ、気がつけば距離を置き、いつの間にか離れていく。

唯一正彦だけが、飽きずに俊をかまい続け、そのしつこさに最初は辟易しながらも、気を許せる存在になった。

人気者の正彦だが、それは立ち回りが上手いというより、基本的に素直で明るく裏表がない性格の賜物であることを、俊が一番よく知っている。

だからこそ、（たとえ周囲からは陰悪な雰囲気に見えたとしても）俊は正彦と毎日口をきき、食事を共にし、タイミングが合えば一緒に出かけることもある。

俊にとって受け入れがたい人間であれば、まず、必要以上の会話はしないし、余暇を共に過ごすようなこともない。

中学までは、それは正彦だけだった。

そんな俊にとって、加奈は2番目に現れた、心を許せる存在であり、俊の世界を広げてくれた、功労者でもある。

それは、高校に入学して、1月余りたった頃、丁度1年前。

「絵、好きなの？」

それが、初めて加奈と交わした会話だった。

芸術の選択科目として、美術を選んだ俊だったが、特別興味があるわけではなかった。

別に、部活動が強制されているわけではなかったので、ぜひどこかに入部する、という気はなかった。

たまたま美術の授業中、美術室の隅に固められた、描きかけのキヤンバスに目をやった。

木炭デッサンだった。

そこに描いてある人物に見覚えがあって、つい、マジマジと見てしまった。

そこで、加奈に声をかけられた。

振り向くと、今見ていたデッサンに描かれていた少女が、そこにいた。

「これ、美術部員の作品なの。新入部員は、まずモデルをやるのが、慣例なんだって」

「美術部員なんだ……三上？……さん？」

まだ、名前と顔が一致せず、名札に目をやりながら、俊は聞いた。

「うん。……これ、山口先輩の絵……上手なんだけど、ちょっとオーバーだと思わない？私、こんなにきつい顔してるかな？」

俊が目を奪われていたデッサン画を示して、加奈は苦笑した。

その絵の中の少女は、その強いまなざしや、引き結んだ口元が、見ようによってはきつい、というより、厳しい表情に見えなくもない。

「でも……とても意志の強い、まっすぐな表情をしていると思う」
目を奪われたのは、少女が持つ表面的な美しさよりも、内面の美しさ。

真摯で、誠実で、強い生命の輝きを、その絵から感じた。

それは、加奈本人にも、もちろん備わっている。

「いい、絵だね。とても」

それは、俊の素直な気持ちだった。

「……高天君。よかったら、1度美術部に来てみない？今日の放課後も、この教室で活動しているから」

そんな成り行きで、美術部に顔を出すことになったのだが。

この学校で美術部がマイナーであるのは、単に人気がないということだけではなく、変わり者揃い、ということも大きな要因になっていた。

あの絵を描いた、今は3年生で部長になっている山口^{やまぐちつとむ}励先輩は、絵を誉めた（と加奈が紹介がてら報告した）俊に対して、俊以上につれない眼差しで『ふーん』と答え、キャンバスに向かっていた。あつけにとられた俊に対して、山口先輩は手を止め、傍らのスケッチブックと鉛筆を俊に押しやった。

「好きなもの、描いてみて、ってことですね？」

加奈が聞くと、無言で頷き、再び自分の作品に取り組む。

スケッチブックを開くと、そこには様々な筆致で描かれた鉛筆スケッチが並んでいた。

サインを見れば、一人のものではなかった。

所々、ページが剥がされた後もあった。

「ゲストブック、みたいなものかな？自己紹介するより、作品を見た方が早い、って、山口先輩の持論なの」

「俺、そんなに上手くないよ？」

「大丈夫。私だってほら、そんなに上手くないよ」

ページをめくって、加奈は自分のスケッチを開いた。

「……優しい絵だね」

筆致は荒いが、穏やかな眼差しの女性の横顔が描かれていた。

優しい目元や口元はしっかり描かれているが、他はあまり書き込まれておらず、逆に、表情が浮き立っていた。

「これ、モデルは？」

「うーん、直接はいないかな。何となく、筆の赴くまま描いた、って感じ。だから、細部は描きこめなかったの」

とはいえ、俊にとっては、なかなか心ひかれる絵であり、加奈の才能を垣間見た……というのは大げさかもしれないが。

余計に自信がなくなった俊だったが、促されるまま、隅に置いてあったイーゼルを描き始めた。

人物よりは描きやすいだろうと思ったが、バランスを取るのが意外に難しく、何だか薄っぺらい絵になってしまった。

何度も線を足していくうちに、ますます不格好になってしまったが、俊は描きこみ続けた。

何となく、木の材質感を出せたかな、という所で、俊は手を止めた。

「なかなか、いい絵を描くな」

背後から声がして振り向くと、俊の絵を覗き込むようになっていた山口先輩と目合った。

「デッサン力はまだまだだが、根気がある。それに、意外と情熱があるな、見かけと違って」

「……？」

「熱心に、木の目を見ていたな。物事に真剣に取り組む姿勢は、評価すべきだ。よろう。入部を許可する」

「……は？」

まだ、見学に來ただけで、入部したいとは一言も……。

「ここ数日、三上目的の冷やかしばかりでうんざりしていたが、なかなかの逸材だ。……用心棒にもなる」

「あの……」

「入部については、一応、部長がいるから、話を聞くとよい」

言うだけ言って、三再び自分の作品に取り組む山口先輩を、俊は茫然と見つめた。

「……ごめんね。入部は無理しなくていいよ」

『一応』部長であるらしい、女生徒が声をかけてきた。

「……入ります」

「え？」

「入部します。美術部に」

そんな経緯で入部してから、もう1年になった。

すでにその当時から、近寄りがたい雰囲気の俊は、周囲の人間に遠巻きにされがちだった。

しかし、山口先輩程ではないにしても、他の6人もどこか世間離れしていて、俊の噂はあまり気にせず、歓迎してくれた。

（つまり山口先輩を入れて7人。内訳は3年生3人、2年生2人、1年生2人である。俊が入部しなかった場合、3年生引退後、5人を切ってしまい、同好会に格下げになる恐れがあったのだ。その点でも、俊が入部したことは、皆から大変喜ばれた。）

加奈の他にもう1人いる同じ学年に唐沢斎からさわいつぎという男子がいた。

粘土をいじっていれば満足、という陶芸オタクで、部活の為だけに学校に来ているような（というか、授業中も美術雑誌を読んでいる、ろくすっぽ聞いていないらしい。なのに成績は良く、学年30番より落ちたことがない）変わり種で、俊を含めて、周囲の様子にあまり関心がない。

一見傍若無人だが、他人の意見に左右されることもないし、良くも悪くも人の噂話に興じることがない。

そういう意味で、俊は斎に対して、好意を持っていた。

それは、美術部全体に言える事であった。

山口先輩やもう1人の3年生である真島美由紀先輩ましま みゆき、加奈……そしてまだ十分に人間性を把握してはいないが、今のところ問題なく接することが出来ている（と俊は思っている）1年生の2人。

それぞれが気儘に活動しているようだが、やるべきことはきちん

と行う、緩やかさとまとまりを持った、この部で過ごす時間が、俊には、とても大切だった。

第1章 麗しき転校生

2

「そういえば、蓮なんかもイメージかも。神々しい感じ?」

部長に言われて図書館に美術名鑑を返しに行く途中、不意に加奈が呟いた。

転校生に対する適切な喻えが思い付かなかったのが気に入らなかったのか、ずっと考え込むように寡黙になっていたのが、やっと晴れ晴れした表情になった。

「……蓮……うん、いいね」

重い図書類を加奈に持たせるのは忍びなく、そのほとんどを抱えた俊は、やや間を置いて相槌を打った。

「そう! 何だか、オーラが違うっていうか、力を感じるのよね……創作意欲が湧くなあ」

こと、絵に関しては常の『大人っぽい美人』の皮を脱ぎ捨てて、子供の様に目を輝かせて多弁になる。

そんな加奈を見るのが俊は、嫌いではなかった、が。

「……?」

階段を昇ろうとして、急に表情を曇らせた俊に、加奈は口を閉じた。

「今……声がした。……悲鳴みたいな」

加奈も、ジッと耳をすます。

図書館や家庭科教室のある棟は、一般教室からグラウンドや理科棟に通じる渡り廊下を兼ねていて、校舎全体のほぼ中心にある。

放課後ともなれば、図書館のある2階はともかく、被服室や調理実習室のある1階付近は、人氣がなくなる。

家庭科教諭が非常勤の為、不在時はほとんど使用されていないの

だ。

故に、運動部や吹奏楽部の練習の音がよく響き、職員室から見えにくい中央のグラウンド側出口付近は不良たちがたむろするのに好都合であり……知っているものは決して、その通用口は使わない。知っているものは、である。

今の時期、まだ学校生活に慣れていない1年生が、紛れ込んでもおかしくはない。

「先に、行ってくれないか」

「加奈をみすみす危険な目に合わせるわけにはいかない。

安全圏の2階に避難させようと促すが、加奈は首を横に振った。

「ここであつてから、何かあったら大声出してね」

この位置からなら、件の出口に近く、職員室もすぐそこだ。

冷静な加奈の判断と譲歩に納得して、俊は図書類を近くの展示棚を兼ねた窓辺に置くと、中央に向かって歩き出した。

「……はなして！」

耳に届く、少女の声。

凜として、だか、少し震えている。

「……やめて下さい……」

もう一人、こちらは今にも泣き出しそうなほど、弱々しく、か細い声……おそらく少女のもの。

「ちょっとお話ししようって言ってるだけだよなあ」

「そうそう、学校ん中、案内してあげるからさあ」

「お断りします」

「ヒュー！強がっちゃってー。いいね！好みだな」

「てめえは可愛い子なら、ミンナそう言うじゃねーか」

「あれー？そうだったけ？」

下卑た笑い声が響く。

「こっちはビビりまくっているし。いいな、初々しくって」

「や……いや！」

「何す……モゴッ」

「あんまり騒ぐと、お友達が痛い思いするかもよ」

くぐもった少女の声に被さるように、脅迫めいた男の低い声が重なる。

「な、付いてこいよ……」

「……やめろ」

突然背後から響いた声に、不良っぽい男子生徒二人は振り向いた。二人とも制服を改造して着崩し、チェーンを何本も手首や腰に巻き、じゃらじゃらさせている。

かなり強くブリーチした長髪を一人はポニーテール状に結わえ、もう一方はオールバックにして後ろに流している。

耳はもとより、鼻や舌にもピアスをはめている。

校則が緩やかで、一応制服を着用すれば、かなり自由な装いを認めているとはいえ、度が過ぎれば見えて気分が悪くなる。

人の格好にあまり関心を持たない俊だったが、力に任せて少女に不躰な振る舞いをしている所を目にしては、不快感は一層強まる。

「何だよ……」

凄もうとして、男子生徒らは俊の視線に言葉を失う。

「……高天先輩！」

涙ぐんで俊の名前を呼ぶ少女は、よく見れば美術部の新入部員、加西珠美^{かさいたまみ}だった。

「……お、オメエには関係ねーだろ……」

絞り出すように、ポニーテールの方が何とか言葉を紡ぐ、が。

「大事な後輩と……クラスメートの妹だ」

そう言って俊は傍らの、もう一人の少女に一瞬目を向け、再び男子生徒らを見据える。

「……覚えてろっ！」

それだけ何とか言い捨てて、二人は走り去っていった。

「高天先輩！ありがとうございます！」

泣きべそをかく珠美を扱いかね、やや途方にくれていると、折よく加奈が現れて珠美の肩を抱き、ハンカチを手渡す。

「……タカマ、さん？」

もう一人の少女が、ゆっくり、俊の名前を口にした。

「……遠野さん、かな？」

その呼び掛けは、表情も口調も平坦で……しかし穏やかだった。

「はい。遠野^{とおの}美矢^{みや}、です」

答えて、不意に気が緩んだらしく、ポロリ、と一筋涙を溢した。

黒目がちな瞳を伏せ、幾筋もの涙が、その後、褐色の頬を濡らし続けた。

気がすむまで泣いて、ようやく泣き止んだ二人の少女を、俊は美術室に連れていった。

美術室の流しでタオルを絞って（加奈が保健室から調達してきた、蛇足ながら保健委員だったりする）、真っ赤に腫れ上がった瞼を冷やしていると、バタバタと足音がして、慌ただしく音を立てて扉が開いた。

「美矢！」

「……兄さん」

俊のクラスに入った転校生の遠野和矢が、血相を変えて飛び込んできた。

「だ、だい……」

「大丈夫。高天先輩が助けてくれたから」

すっかり落ち着いた美矢が、息も絶えだえな兄をなだめるように言った。

「えっと……高天、君？ありがとうございます。本当に、ありがとう」

「いや……特に何も……」

涙ぐむほど感謝され、俊は何だかむずむずして、居心地が悪くなった。

それほどのことはしていないのに。

「カッコよかったです！高天先輩。『やめろ！』って一喝して、ひと睨みで、不良さんたち、退散してしまいました」

こちらはまだ感激冷めやらぬ様子の珠美が、セッセと武勇伝を語ってみせる。

他の美術部員は、興味なさげに、あるいは微笑ましく見守り、特に囁し立てることもなくそれぞれの作業をしていたのが、俊には救いだった。

「本当に、たまたまで」

「偶然でも、居合わせてくれてよかった。本当にありがとう」

感謝に尽きない様子の和矢が、ふと、辺りを見回した。

「そう言えば、このことを知らせてくれた彼女は……？」

「ここにいます」

美術室の入口で、息を切らせて加奈が答えた。

「もう、遠野君、美術室、って聞いただけで、位置も聞かずに飛び出していくんだもん。しかも方角違うし……探したよ。よく辿り着いたね」

加奈がタオルを調達したあと、和矢に知らせに教室に戻ってから、既に十数分過ぎていた。

和矢が慣れない校舎内で迷っていないか心配して、探し回ったらしい。

「……すみません。平常心をなくしてました」

「まあ、いいわ。むしろ顔色1つ変えない方が、不気味だし」
それには俊も同感だった。

それに、神々しいまでの落ち着きと存在感を持つ転校生の、人間味のある一面が見られ、何だか好感が持てた。

父が日本人で、母がインド人だと言う遠野兄妹は、商社勤めの父

の仕事の都合で、日本とインドを行き来しているという。

大学受験に備えて、まだしばらく帰国できそうにない両親の元を離れ、父方の叔母に世話になっている……そこまでは、転校の挨拶で聞いていた。

「落ち着いたら、部活動もしたいと思っていたのだけど……これも縁だと思うし、早速美術部に入部してもいいかな」

「……」

無言で、俊は山口先輩を見る。

現部長の山口は、同好会降格寸前の美術部にとって、希少な入部希望者を何度も門前払いにしている。

曰く『悪魔は芸術を解さない』。

絵を書かせてみれば、その人間の良し悪しが分かるから、一番効率の良い判断基準だという。

上手い下手ではないことは、俊が一番分かっている。

ただし、山口先輩以外にはどこら辺が判断基準なのかは謎である。そして、例の如く、スケッチブックが渡された。

「わあ、上手！インドの石仏ね」

スケッチブックを覗き込んで、加奈が感嘆の声を上げた。

「言葉が通じないときも、絵だと分かり合うきっかけになるから……行った先々でスケッチしていたんだ」

鉛筆だけで濃淡もつけて、作品としても十分に見ごたえのある群像を書き上げた。

「俊はどう思う？」

珍しく、山口先輩がひそひそと俊に意見を求めてきた。

「あ、上手だな、と」

答えてから、それは判断基準になっていないらしいことを思い出す。

「何だか、楽しんで描いているようです」

「一緒にやっていけるかね？」

「……大丈夫だと」

俊の答えを聞いて、山口先輩は、声を大きくして、入部許可を言い渡した。

「私は……」

「あ、兄妹特典で許可」

美矢が尋ねると、飄々として山口先輩は答えた。

呆氣に取られる遠野兄妹を尻目に、山口先輩は作業に戻り、相変わらずのマイペースぶりに、俊は小さくため息を吐いた。

何だか山口流の判断基準が掴めた気がしたのに、また分からなくなってしまうた。

「まあ、そのうち、慣れるから……多分」

説得力がないことを自覚しながらも、俊は一応フォローしてみた。慣れなくても、何とかやっていけるから、と自分に言い聞かせながら。

慌てて笑顔を取り繕い、よろしく、と返す和矢の横で、まだ固まっていた美矢に目を向けると、パツとめを反らした。

その頬が赤く染まっている様子を泣き顔を見られたことに対する恥ずかしさの表れだろうと、単純に微笑ましく思った。

……胸の奥に、小さな炎が灯り、燃え始めたことには、まだ気が付いていなかった。

第1章 麗しき転校生―3

3

「くそっ！ムカつくなー！あのヤロー！」

バンッ！と拳でテーブルを叩いた。

「っざけんなよ！ってんだ！ぜってー痛い目、見せてやる！」

「荒れてんな、スガちゃん」

空のグラスを叩き壊されないうちに避難させようと、セッセと片付けながら、ウェイターが声をかけた。

ちよっとした喧嘩や小競り合いはしょっちゅうだし、備品を壊されたくらいでは動じることがないマスターだが、今このテーブルを陣取っているのは、自分の『顔』でこの店に出入りするようになった奴らだ。

備品を壊された暁には、自動的に自分の給料から天引きされる羽目になるに違いない……経験的に分かっている。

余計な出費は避けたい、と言うのは、ごく当たり前の心理であるう。

「どうもこうもないっすよ！優等生ぶって、何かっちゃあ正義ヅラして……」

「バックに族がついてるとか、極道の跡取りだとか、イロイロ噂はあったんすけどね。確かに迫力あって、目え合わせただけで、ビビッちまうんで」

息巻くスガに気圧されるように、もう一人が言い訳めいた説明を加える。

「そんなのがセだっていうじねーか！」

「いや、でも俺、中坊んとき、アイツ見たんだ。サッカー部の試合で」

「シマちゃん、あの頃は真面目にサッカーやってたからな」

「オカダさんだって」

「……昔の話だ」

オカダ、と呼ばれたウェイターが、苦笑する。

「で、何を見たんだって？」

「試合中に、相手の選手がケガして……」

「そんなの、普通にあるじゃねえか」

スガが横やりを入れる。

「フツのケガじゃねえよ。サッカーボールが弾け飛んで、相手の選手は切り傷まみれだ。傷自体は皮膚を薄く掠める程度で、でも、数が半端じゃなくて。そばにいたアイツは……無傷だった」

ゴクン、とスガとオカダは唾を飲んだ。

「相手の選手ってのが、プレーが荒くて、地元じゃ結構有名で。反則紛いのラフプレーで対戦相手ケガさせることもよくあって。そんな時もアイツからボール奪うのに、肘で腹を打ちやがって。審判から見えないようにして。アイツがよろけた隙にボールを奪って、走り出そうとした途端、ボールが弾けた」

「……それで？」

「かまいたちだろうって事で落ち着いた。運の悪い事故だって……わざとそんなことができる人間はいないって……でも！ケガはともかく、ボールは弾の痕が残らないような特殊な銃でも使ったんじゃないか、って噂になった」

「……それでアイツは？」

「さあ？その後、サッカーもやめちゃったみたいだし。サッカーやってる連中は結構知ってるみたいけど、やられた相手が相手なもので……いい気味だっと思ってたんじゃねえの？アイツの名前は広まらなかったみたいだ」

「そいつ、何て名前だっけ？」

「たか……」

「タカマ・シュン、だろ」

シマの答えに被さるように、別の声が重なる。

「話を聞かせてくれないか？ そいつとは、ちよつと因縁があつてね」

「……オカダさん、いいんスカ？ あいつら、後輩なんでしょ？」

「中坊ん時の、な。今はただの顔見知りだよ」

「冷てーな」

「どーせ、オレらみたいな高校中退とは違って、最後はしっかり大
学行くつもり半端ものさ。あんなでも、事件さえ起こさず、試験
落とさなくちゃ、卒業させてくれるんだからな。石高は。あいつら、
あれで頭はいいんだぜ。お利口さん、なんだよ」

そう、似ているようで、自分とは違う。

寝食忘れて、ひたすら打ち込み、スポーツ特待生になった挙句、
ケガをして、さっさと見切りをつけられた。

バカ高い月謝を払って一般クラスに入るか、公立に編入するか、
もしくは……ろくに勉強してこなかった自分には、リタイアの道を
選ぶしかなかった。

「でも、あの人……シバさんて、結構ヤバイ人なんじゃ？」

「さあ？ マスターが頭が上がらないってことは確かだけどな」

昼間から未成年にアルコールを出すような店だ。

その為に、人前では言えない所に納めるものも納めている。

そのマスターが、気を遣う相手だ。

どのような筋の人間かは知らないが、まともな立場の人間ではな
いだろう。

「少しは痛い目を見たらいいんじゃないか？」

「少し、で済みますかね？」

だとしても、関係ない。

少なくとも、そんな人間に不興を買ってまで、口出しするような
命知らずでもなければ、義理もない。

「気にするなよ。ただ、客同士が、意気投合しただけさ」

その結果、何が起きても、知らんぷりをすることだ……自分が大切なら。

「それが、本当に利口な人間ってもんさ」

第2章 甦る悪夢

1

6月に入り、文化部は俄然忙しくなる。

7月の文化祭に向けて準備が本格化するためである。

美術部も例にもれず、やはり何となく気忙しい。

もっとも、個人の作品展示がメインで、後は会場の手配の為に文化祭実行委員会に時折出席（部長でなく加奈が出てるのは、現実処理能力を鑑みての選択である）するくらいで、後はいつもと変わらない、はずだった。

「スゴイ！上手ねー！」

本人は女の子らしいと思っているようだが、聞いている方は頭が痛くなるような、変に高い声音が、さっきから耳障りで仕方ない。

加奈は、筆を休め、ふう、とため息を吐いた。

集中が途切れて、作業が進まない。

作品の出来不出来を『彼女達』のせいにしてはいけなのだが、最近顔を見るだけで、イラついて、作業に没頭出来ない。

先月、遠野兄妹が入部した時は、いくらか騒ぎになるだろうとは、予測していた。

入部希望者が増えたことは想定内だったし、その大半を山口部長が追い返すことになるのも分かっていた。

簡単に入部させて貰えないと分かり、ひとまず落ち着いた、のだが。

『見学したいんですが』

数に任せて押しきるつもりなのか、5人の女子学生がやって来たのたのは7日前。

『今から文化祭に出展するような作品を作るのは無理かもしれませんが、何かお手伝いさせて下さい』

殊勝な言葉に、無下に追いつ返すことができず（山口部長が不在だったことも大きかった）、とりあえず副部長の真島先輩は、1週間の仮入部を許可した。

とはいっても、前述の通り、基本的に個人の作品を仕上げるのが現時点での主な作業であり、手伝って貰うことは特になかった。

一応出来る範囲で作品制作に挑戦してみるように、真島先輩は話したが、気が付けば和矢の周りをうろちよろしてる。

「ねえ、遠野君で、インドにはどのくらい住んでいたの？」

「英語の他に、何か国語くらい話せるの？」

その上、昨日あたりから、無遠慮な、プライベートに関する質問が混じるようになってきた。

妹の美矢に対しては、一応優しい言葉をかけているようだが、美矢の方が相手にする気がないらしく、そっけない態度で応えている。逆に和矢の方は、微笑みを絶やさない。

それがますます彼女達の行動をエスカレートさせていた。

「うーん、話せば長くなるから」

「あいさつ程度なら、他にも話せるけど。また後でね」

ことが美術から離れてくると、そうあたりさりなく言葉を返していたが、いかんせん、優しい笑顔付きでは効果はないに等しい。

拒絶されていることに、彼女達は気付いてはいないだろう。

いっそ、はつきり迷惑だって言えればいいのに。

加奈の目から見ても、和矢は熱心に作品に取り組んでいたし、彼が美術部に入ったことには不満はない。

ただ、彼の（不本意ながら）取り巻き連中は、正直ウザい。

兄妹だけあって、美矢も和矢によく似たきれいな顔だちをしている。

物静かで凜とした清らかな美貌。

和矢が白薔薇なら、美矢は同じ白でも百合か菊花。

華やかさには欠けるが、侵しがたい気品がある。

その意味では、社交的な和矢に比べて、どこか近づきがたい雰囲気がある。

そのためか、今のところ美矢に近づこうとする男子はいない。

転校初日に美矢に絡んだ不良男子生徒2人を俊が撃退したという噂も手伝ってか、美術部に押し掛けてくることもなかった。

それに比べて。

加奈は、華やかな美貌の少年をちらりと見て、小さく溜息を吐く。
……まあ、今日で仮入部も最終日である。

仮、ということまで今まで大目に見てきた部分もあるので、本気で入部する気なら、最初にきちんと話をしなくちゃ。

雑談するな、とは言わないが、真面目に作品に取り組んでいる部員の邪魔だけはしないようにと。

そう思ったら、何だか黙ってはいらなくなってきて、加奈は女生徒達に声をかけようと、立ち上がった。

その時。

「静かにしてくれないか」

抑揚のない、平坦な、低い声。

「迷惑だ」

簡潔すぎる言い回しに、女生徒達は黙り込む。

何か言おうと口をあけながらも、その声の主を見て、すぐには反論できずにいた。

「な、何よ……ちょっと話すぐらい……」

リーダー格の女生徒が、何とかそれだけ口にするが、目線を向けられて、続く言葉が出てこない。

「……ひどい……そんな言い方……」

別の女生徒が、涙声でつぶやく。

「……ウザッ」

ぼそっと、別の方向から声が聞こえる。

「唐沢君……」

美術室の隅で石膏の塑像を手直ししていた唐沢斎を、加奈は振り返った。

石膏の粉で真っ白になりながら、斎は続けた。

「はつきり言って、うるさいんだよね。ファンクラブなら、よそでやってくんない？……あと、なにかっちゃすぐ泣く女、ウザい。涙を武器にしたいなら、せめて、きれいに泣けよ？半端なのは見苦しいったらありゃしない」

普段は周囲に関心を示さない斎だったが、彼の美意識に反する行為には、毒舌を惜しまない。

「斎……」

「たとえきれいでも嘘泣きはよくない、っていう、俊のお小言は聞きます。俺はいいの。たとえ嘘でも、きれいな涙なら。嘘でもいいって思わせるくらい、きれいな涙なら、俺は認める。でも、ちよっときついこと言われたくらいで、誤魔化すための薄っぺらい嘘泣きは認めない。見苦しい。醜悪だ。たとえ鼻水たらしめても、本気のぐちゃぐちゃの泣き顔の方が、よっぽど美しい。真実の感情の吐露に勝るものはない！」

……という、斎の持論の展開が始まり、何となく、緊迫感が薄れて。

「……そういうわけなので、真面目に美術に取り組む気がないなら、本入部は見送ります。別に大作作れとは言わないけど、何か目標を持って取り組む気があるのなら、入部届け持ってきてください」

何がそういうわけなのかよくわからないまま、加奈の言葉に毒気が抜かれたように、女生徒達はぞろぞろと美術室を後にする。

「さすが。上手くまとめたね」

他人事のように山口部長がパチパチ手をたたく。

「……っていうか、部長が言って下さいよ。2年生同士じゃ、角が立つし……」

「いや、それこそ、我らが引退した後、同じ騒ぎが起きることが目に見えている。ここは、次代を担う2年生諸君に任せるべきだと、

静観していたんだよ。いやあ、よかった」

……威圧感ばかりで言葉の足りない俊と、話し始めれば毒舌か持論しか奮わない斎では、苦勞するのは自分ばかりの気がする。

見当違いとは言えない未来予想図に、加奈は、深く、ふかーく、溜息を吐いた。

第2章 甦る悪夢―2

2

文化祭まで、残り10日をきり、学校全体が気忙しく、浮き足立っていた。

あの騒ぎは何だったのか……と思うほど、和矢を取り巻いていた女生徒達は鳴りを潜め、美術部は、忙しいながらも平和な日々を送っていた、が。

その日は、加奈の指示のもと、校内に掲示する美術部のPRポスターの作成をしていた。

「1年生、遅いね。授業長引いてるのかしら」

俊が作業の手を止めて、分からない、と言うように軽く首を傾げた。

「美矢と珠美ちゃんは同じクラスだけれど、^{たつみ}異君はC組だったよね？」

美術部にすっかり馴染んだ和矢が、もっともな疑問を呈した。

加奈は、とりあえず自分の作業を止めて、1年を待つことにした。作業自体はそれほど大変なものではないが、1年生には初めての文化祭なので、手順などは一緒に進めておいた方がよいと思った。

「唐沢君、今日は異君、来てるのよね？」

1年生の唐沢翼は、唐沢斎の弟である。

加奈の問いかけに、1人黙々と作業を進めていた斎が、顔をあげて頷いた。

と、その時。

「大変です！」

血相を変えて飛び込んできたのは、噂をしていた当人……唐沢巽その人だった。

兄の斎とは対照的に、表情がころころと変わる、愛嬌のある少年である。

かといって、にぎやかというわけでもない。

口数は少ないのに、考えていることが周囲にダダ漏れ、という特技を持つ（本人はそれを大変憂いているが）。

「どうしたの？」

加奈が尋ねると、困惑しきった、今にも泣きそうな表情で、巽は息を切らせて喘ぐ。

「あの……たま……みや……」

「珠美ちゃんと美矢ちゃんが、どうかしたの？」

「2年……呼び……あ……」

俊がマグカップ（美術部備品）に水を汲んできて、巽に差し出すと、受け取ってゴクゴクと一気に飲み干した。

「あ……ありがとうございます。さっき、部に来る前にB組の友達に借りてたテキスト返そうと思ってのぞいたら、何だか、皆で騒いでいて。聞いたら、2年生に珠美が呼び出されて、美矢ちゃんも一緒に……行って……僕、そこらじゅう聞いて回って、それで……どうやら、家庭科棟の方に行ったら……」

「家庭科棟って、例の？」

不良の溜まり場の？と和矢が眉をひそめる。

「うん、でも、今は文化祭前で放課後も出入りがあるから、そういう意味では、危険はないと思うけど……被服室は、2年C組が使用予定のはず……」

それは、例の女生徒達のクラスだった。

「何人もで囲んでたって。あと……男子もいたって……」
そこまで聞いて、美術室を飛び出したのは……。

俊だった。

「だから、何も脅かしているわけじゃないのよ」

おもねるような、女生徒（その1）。

「ちょっとだけえ、展示会場を留守にしてくれればいいのお。それだけなんだからあ」

甘ったるい喋り方で、女生徒（その2）が続ける。

「その間に、大切な作品をめちゃくちやにしよう、というわけですか？」

凜とした、落ち着いた声は、褐色の肌の、エキゾチックな美少女のもの。

「そこまでしないわよ。……もちろん、あなたたちや遠野君の絵には何もしないわ」

「他の人には何かするってことじゃないですか！」

言い返すのは、美人というよりはかわいらしい感じの少女……強い物言いだが、やや声が上ずっている。

「……たく、この子まで連れてくるから、やりにくいったら……」

交渉するのをあきらめたのか、女生徒（その1）、急に高飛車な口調で、舌打ちしながら呟く。

「だってえ、しょうがないじゃないーい。一緒に来るって言うんだもん」

女生徒（その2）が、ふてくされて言い捨てる。

「だからって、何も遠野君の妹なんて……」

「そうよ、男子も役に立たないし」

女生徒（その1）に同調する他の少女たち。

「……だって、俺たち聞いてないよ。こんな……」

教室の隅で、つまらなそうに見ていた男子生徒が、言い訳するようにつぶやく。

「よりによって、美術部なんて……俺、イチ抜けた」

「あ、俺も抜ける」

「ちよっと！いまさら知らんぷりなんて！」

ヒステリックにわめく女生徒（その1）を尻目に教室を出ようとする男子生徒たちを見て、他の少女たちも目を見合わせる。

1人の少女が、あーあ、と溜息を吐く。

「やっぱり、よくないよね。こういうの」

「ちよっと、あんたまで裏切る気!？」

「でもー、考えがあるって言うから一応付き合ってみたけど、私こういうの、合わないんだよね。クラくない？」

「真実!あんた、よくも!」

「だって、私、気に入っちゃった。これだけの上級生に囲まれて、堂々としてる1年生」

真実、と呼ばれた少女が、1年生……美矢と珠美に、ニコツと笑顔を向けた。

「あんたって子は!」

「……形勢逆転ですね。そろそろ解放していただけませんか？」

美矢の冷静な物言いに、さらに頭に血を昇らせた女生徒（その1）が、キツと美矢をにらみつける。

「そもそもあんたがっ!」

言葉とともに手が拳がり、美矢の頬を打とうと振り下ろそうとした、その時。

「……いい加減にするんだな」

腕を掴まれて、振り向いた女生徒（その1）は、みるみる血色を失っていく。

「あ……」

真っ青になって、出口方向に目を泳がせれば、出て行こうとしていた男子達がへたり込んでいる。

出入り口の戸を開けて、そこに（まさに）仁王立ちしていた俊の一睨みで、声もなく腰を抜かしてしまっていたのだ。

へなへなと座り込む女生徒（その1）から手を離すと、美矢たち
に向って足を進める。

「高天……」

先輩、と続けようとする、美矢の声の代わりに、パシン、と頬を
打つ音が響いた。

軽い痛みが襲い、美矢は反射的に頬を押さえた。

それほど強くはない……赤くもならないだろう、だが。

俊に頬を打たれた。

そのショックで、美矢は言葉を継ぐことができずにいた。

「迎合することはない……だけど、挑発するな。あのまま殴られて
いたら、痛みはこんなもんじゃない」

静まり返った室内に、俊の低い静かな声だけが響く。

加奈や和矢が姿を現したのを見て、俊はそのまま教室を出ていく。

「高天先輩！美矢ちゃんは、私をかばって！ホントだったら、私だ
け連れてこられるとこだったんです！」

「……だったら、ノコノコついてこないで、助けを求めるべきだ。」

文化祭前の大事な時に何かあったら、どうするんだ」

振り向きもせず、それだけ言って、俊は歩き出す。

「……美矢ちゃん……」

加奈が、そっとハンカチを差し出す。

それで、美矢は自分が泣いているのに、初めて気がついた。

打たれた頬は、もう痛みはなかった。

ただ。

心が、痛かった。

第2章 甦る悪夢―3

3

晴れた青空の下、にぎやかな声援に囲まれて、試合は中盤を迎えた。

1対1の同点で後半に突入し、両チームとも何とか流れを自分達のチームのものにしたい……そんな思いで、試合は白熱していた。

ボールを持ったのは自チーム……それも、エースだ。

少年は、パスを受けようと、相手チームの陣の隙をぬって前進していく。

予想通りパスが来る。

相手チームの選手はエースに集中しており、パスを返すのは難しかった。

D Fが、自分に向かってくるのを感じて、そのままドリブルでつっこむ。

ガードが手薄になったエースが、ゴール前に上がってくる。

パスを送りたいが、D Fがしつこく食い下がり、なかなかチャンスをつかめない。

D Fを振り切り、何とかパスを送ろうとした時……。

『……ぐえっ……』

胃のあたりに肘鉄を食らい、体勢を崩した。

相手D Fの反則だった。

だが、ホイッスルは鳴らない。

審判には、肩を当てただけに見えたらしい。

『わざと……』

それだけ言うと、少年は、よろめいて、膝をついた。

胃液が上がってくるような、酸っぱい味が口に広がる。

ボールを蹴るDFの声が、小さく聞こえた。

『バーカ』

少年は、怒りを込めて、ボールを見つめた……。

「……！」

はっとして、がばっと身を起こした。

周囲を見回し、それが自分の布団の上だということに気づいて、俊は安堵の溜息を吐いた。

時計を見れば、まだ日付が変わる前だ。

床について、まだあまり時間は経っていない。

……しばらく、見なかったのに……。

もう、3年になる。

中学2年の時、サッカーの県大会で起きた、惨事。

木っ端みじんに破裂したサッカーボールと。

無数の切り傷で、血だらけになった、少年。

幸い、軽傷ではあったけれど、一時試合は中断し、結局再試合になった。

かまいたちでボールが破裂し、『運悪く』そばにいた少年もケガをした。

『事故』として、決着がついた。

……だけど、俊は、知っている。

あれは、自分がやったことだ。

ボールと、それを持つ少年に向けた、思い。

激しい怒りと、憎しみを。

自分の中に、渦巻く感情の高ぶりに、俊自身が気を失うほどだった。

あの時、正彦が駆け寄ってこなかったら、そのまま自分を失っていたかもしれない。

『俊、落ち着け！自分をしっかり持つんだ！』

あの時、自分は、何かをつぶやいていたと思う。
何か……怨嗟の言葉を。

『大丈夫だ。大丈夫……』

正彦の言葉に、徐々に気分が静まって、気が付いたら、DFの少年が担架に乗せられて運ばれて行くところだった。

『正彦……』

『腹、つらくないか？あいつ、ラフプレー多くて、結構有名なんだ。審判、もっとよく見てくれてっんだ』

素知らぬ顔で、正彦は文句を言った。

『ごめん』

せっかくのチャンスを……大事な試合を……。

『ごめん……』

言葉足らずの俊に、親友のエースストライカーは、にっこり笑って答えた。

『大丈夫！』

……だが、結局再試合は、負けた。

俊は思うように体を動かせなかった。

夢中になってプレーしたら、また何か起こりそうで、試合に集中できなかった。

『大丈夫、また来年がある！』

そう、正彦は笑ったが、俊は、サッカー部を辞めた。

もう、何かに感情を高ぶらせるようなことは、しない。

そう、決めた。

……決めた、のに。

あの時。

美矢と珠美が、上級生に呼び出され、しかも男子生徒がいると聞いて、真っ先に思い出したのは。

初対面の時、不良たちに絡まれていた、あの光景。

腕を掴まれ、手で口をふさがれた、美矢の姿。

震えながら、それでも気丈にふるまって、ほっとしたら、ぽろぽろ泣いて。

気が付いたら、美術室を飛び出していた。

被服室に入ったら、呼び出した方は仲間割れしていて、事態は思ったほど深刻ではなくて、なのに。

美矢が叩かれそうになっているのを見て、俊は夢中で女生徒の腕を掴んで。

感情のままに、美矢を叩いてしまった。

かろうじて、軽く叩く、という程度に力を加減する程度の理性は残っていた。

だが、俊は自分を止められなかった。

そして、きつと内心はおびえていたに違いない美矢に対して、慰めることもせず、きつい言葉を浴びせてしまった。

感情の、赴くままに。

あの時。

万が一、美矢（と珠美）が、危険な目にあっていたら、自分は理性を保つことなどできなかったろう。

そう考えただけで、身震いする。

美矢が害されることに？

その結果、自分が起こすであろう、惨劇に？

答えは出ないまま、俊は、怯えた。

途方もない、感情の高ぶりに。

そして、うずくような、胸の痛みに。

同じ頃。

美矢もまた、眠れぬ夜を過ごしていた。

ベットに入ったものの、気分が落ち着かず、目は冴えるばかり。せめて気分を落ち着けようと、キッチンにお湯を取りに行く。

熱いお湯に、ラベンダーの精油を垂らして、アロマポット代わりにしようと思ったのだ。

今、住んでいる一軒家は、もともと叔母が事務所兼住居に使っていたものの事務所部分を住居にしたもので、もともとの住居部分やキッチン、リビング以外で火を使うとスプリンクラーが作動するようになっていいる。

同居のため、急ごしらえでリフォームしたため、一応住居らしくなっているが、細かな設備はそのまま、美矢の部屋にも、スプリンクラーが残っている。

ろうそくの灯を見ていると落ち着くので、来日してすぐ目についた雑貨屋で見つけた時、よく考えず買い求めたのだが、叔母にスプリンクラーがあるので使えないと言われ、がっかりした。

けれど叔母が教えてくれた、お湯に垂らす方法は、思いがけず香りが優しく、意外に香りも持続するので、重宝している。

精油はインドから品質の良いものをいくつも持参したので、日によって楽しんでいいる。

ラベンダーは鎮静効果が高いので、就寝時にはよく使う。

「眠れないのか？」

キッチンに行くと、まだ起きていた和矢が、リビングから声をかけた。

うなずいた美矢に椅子をすすめ、温かいミルクティを入れてくれる。

「……おいしい」

生姜とシナモンの香りがする。

「丁度、叔母さんに持っと思っていたから」

和矢の入れるスパイス入りのミルクティ……チャイを味わってか

ら、叔母はすっかりファンになってしまい、仕事で一息つきたいときには、和矢にねだるようになった。

牛乳に茶葉と砂糖を入れて沸かし、スパイスを加えて漉すので、手間がかかるが、とてもリラックスできる。

美矢も、大好きだった。

「もう夏なのに、夜は肌寒いものね」

「この地方は、標高が高いからね。東京にも近いのに、やっぱり、日本の風土は変化に富んでいるよ」

兄と他愛ないおしゃべりをしながらも、美矢は、ふと、考えてしまう。

一体、何がいけなかったのだろう。

決して、挑発なんて、したつもりはない。

確かに、後先考えず、のこのこついて行ったのは、浅はかだったと思う。

だけど、落ち着いて冷静に対応したつもりだったのに、気がつけば相手を怒らせるばかりで。

おまけに、あの人にも、叱られて。

「……昼間のことを、考えているのかい？」

兄の問いかけに、素直に頷く。

「私の話し方って、そんなに気に障るものだったのかしら？」

「また聞きだから、何とも言えないけど。でも、聞き様によっては、そうかもしれないね」

「……」

「美矢の日本語は、間違っていないと思うよ。ただね、落ち着いた丁寧な言葉遣いは、相手と状態によっては、嫌味にも聞こえるね。」

『慇懃無礼』って言葉もあることだし。美矢は、相手に対して悪感情を抱きながら、話していたんだろう？それが、悪い形で伝わったんだろうな」

「悪い形？」

「見下した、という感じに受け取ったのかもね。ああいう、直情型

の人は、相手にされないとムキになるから」

「……善処します」

「でも、美矢が気にしているのは、そんなことではないんだろう？」
にっこり笑う、和矢の目が、面白いものを見つけたかのように、
輝いている。

「高天君のことが、気になるんだろう？」

「……別に」

「泣いていたくせに」

「あれは！……あんまりな言い方だったから」

『文化祭前の大事な時に何かあったら、どうするんだ』

あんな言い方しなくても……。

確かに文化祭前に問題が起きたら、美術部にも迷惑がかかるだろう。

でも、その前に、ケガをしたら大変とか、他に心配することがあってもいいはず。

「……美術部の心配をしているだけなんだわ」

「そうかな？」

思わず口した言葉に、和矢が否定の言葉を返す。

「先週の、木曜日だったかな、美矢が、珠美ちゃんと文化祭のことで話をしていただろう？」

「……？そういわれても、もう、ここ最近文化祭の話ばかりしているもの」

「そういうのではなくて、『文化祭に参加するのは初めてだ、楽しみだ』っていうようなこと」

……そういえば、そんな話をしたかもしれない。

美術部のことだけじゃなく、遅くまで学校に残って準備をしたり、後夜祭に打ち上げ花火が上がることや、模擬店のことや、色々珠美から聞いて、ワクワクして、答えた。

『私、初めてなの。楽しみだなあ』

……そんな、ありきたりの返事だったと思った、が。

「あの時の美矢は、いつもみたいにお澄まししてなくて、すごく楽しそうに笑っていたんだよね。……高天君も、それを見て、笑っていたよ」

「え？」

「分かりにくかったけど、確かに笑っていた。彼らしく、静かにね。それに……」

もったいつけて、和矢はチャイを口に含む。

「……美矢達のことを聞いて、真っ先に飛び出して行ったんだよ。」

高天君

「……」

「三上さんいわく、『あんなに慌てた高天君を見たのは、入学以来、初めてだ』ということらしいよ」

曇っていた美矢の表情が、みるみる明るくなる。

「好きなんだね、高天君のこと」

「そんな……」

否定しながらも、心が浮き立つのを、感じる。

「まだ……よくわからないわ」

「でも、惹かれてるんだよね。美矢は」

意味ありげに、和矢は美矢を見つめる。

「それとも……が、求めているのかな？」

兄の問いかけに、美矢は答えることができなかった。

ただ、甘い胸の疼き確かめるように、思わず胸元をぎゅっと握りしめた。

そこに、灯る火の、熱さを、感じて。

第3章 黄昏の魔性―1

「真実！あんた、美術部に入ってたって！」

「うん。徹夜で作品作って、持っていった。本入部出来たよ」

かみつくように問い質す少女に対して、森本真実もりもとまみは飄々として答えた。

「徹夜で？どういうこと？」

「だって、あれだけの騒ぎになっちゃったら、おいそれ入れてくさいつて訳にはいかないでしょ？だから手土産」

作品、とはいっても、美術にはずぶの素人だ。

何をしていいかわからず、さんざん悩んで。

『……いいわ。入部して下さい』

実質部長の三上加奈が、笑いをこらえながらも、そう言って受け取ってくれた。

「意外と手間かかった。レタリングって、結構難しいね」

中学の美術の教科書を引っ張り出して、ほこりをかぶっていたレタリングセットを使い、画用紙に明朝体で『入部願』、ゴシック体で『森本真実』と、レタリングした。

買ってきた5枚の画用紙を使いきって、何とか見られるものに仕上げた1枚を、提出したのだ。

「でも結構きれいにできたのよ。色も字ごとに変えてみたし」

「じゃなくて、何で今さら美術部になんか入るのよ。あれだけの目にあって……谷津やつちゃんが怒るの、当たり前じゃない！」

美矢に手を上げようとして高天俊に睨まれた谷津マリカは、クラススの女子のリーダー格だ。

今日も放課後買い物に行こうと誘ってきたのを、部活に行くからと断った。

美術部に入ったことよりも、真実が誘いを断ったことに腹を立てて、それ以上話しかけてこようとはしなかったが、その腹いせに他

の友人に言いふらしたのだろう。

……別に言いふらされても、かまいやしないけどね。

入学して同じクラスで席が近かったことから、帰宅部同士、何となくつるんできた。

それなりに楽しくやってはきたし、仕切りたがりのマリカに逆らうのも面倒だったので、今回も言われるまま仮入部したけれど。

付き合っていくうちに、どんどん肌に合わなくなってきた。

「何だか、やっぱり合わないよ。無理して付き合う方がメンドクなってきた」

それに。

「あっちの方が、何か面白そうだし」

それだけは、マリカに感謝しなくては。

今回の出来事がなければ、美術部の面々を……いや、高天俊のことを、よく知らないまま、過ぎていただろうし。

もちろん、美矢や珠美も好ましいとは思う。

でもそれ以上に。

「あのクールさが、たまらない！」

確かに、あの眼差しは、鳥肌ものだった。

でも、怒気を含んだ俊の横顔は意外にも端正で。

美矢に背を向けた時の、眉を顰め憂いを帯びた目元も、別の意味で背筋がゾクゾクするほどだった。

「そういうわけだから、部活いくね！」

嬉々として教室を出る真実。

「……よりによって、高天俊？ 信じらんない……あの冷血男を？」

残された少女は、茫然として、ひとり、つぶやいた。

大きなトラブルもなく、文化祭は進行した。

新入りの真実は、美術部の展示スペースの隅の椅子に座り、あくびをかみ殺しながら、廊下を眺めていた。

さすがに文化祭寸前の入部では、作品制作も難しく（さすがにあの『入部届』を展示するのはためらわれた）、会場設営や当番の割り当てを役目に振られ、黙々とこなした。

それなりに見学者もいて（意外にも石高美術部はレベルの高さで他校では知られていたらしい……何故か校内では知られていないが）、作品の解説を載せたビラを手渡したりと忙しかったが、さすがに後1時間で一般公開が終わるこの時間は、人影もまばらだった。

一緒に当番をしている加奈も、暇そうに窓辺でスケッチしている。……やっぱり、美人だなあ。

テキパキと仕事をこなす快活な面も魅力的だが、鉛筆を動かしながら、時々窓の外をぼうっと眺めている、何となく気だるそうな雰囲気も、またいい。

少しくせのある髪の毛を、今日はポニーテールに結わえていて、おくれ毛が何となく色っぽい。

きめ細かな白い肌は、化粧しなくてもほんのり薔薇色で、唇だって、何も塗ってないのに、つやつやしてピンク色だ。

まつ毛も長いし、色が白い分、そばかすが少しあるけど、そのくらいご愛嬌だ。

あんなきれいな人を、高天俊は傍で見てきたのだ。

……そういえば、1年生の頃、噂になっていたっけ。

中学からの親友以外で、親しく口を聞いているのが、加奈だけで。加奈の誘いで美術部に入ったって。

……思い出して、真実は胸が苦しくなった。

どうやら、それは単なる噂のようだけど。

加奈ではない、他の少女を、真実は思い浮かべる。

俊は、きつと……。

「森本さん？もう、人も少ないし、何だったら、片付けの時間まで、休んでいいよ。私、ここにいるから」

気がつけば、加奈が目の前に立って、真実の顔を覗き込んでいた。「え？あ……でも」

「急に色々やってもらって、疲れてるんじゃない？結構拘束しちゃったし、こんな時間だけど、よかったら、どうぞ？」

……そんなに、くたびれた顔していたかな？

申し訳なく思ったが、正直暇を持て余していたし、お言葉に甘えて休憩をいただくことにした。

廊下に出て、大きく伸びをする。

今から回るのもなんだし、お茶でも飲んでこようかな。

喫茶コーナーはもう終わってるから、自販機行くかな。

気分を入れ替えるように、両手で頬をパチン、と叩いて、真実は自販機のある校舎に向って歩き出した。

第3章 黄昏の魔性―2

これで、大体終わりかな。

まだ、校内は所々ざわめいているが、加奈のいる美術部の展示スペース周辺は、廊下を歩く人の姿もまばらだった。

宴の後、か。

準備は忙しかったが、始まってしまえば、大きなトラブルもなく、あっけなく過ぎてしまった。

先週の騒ぎで、もしかしたら展示物を荒らされるかもしれないという恐れもあったので、当番のシフトを多くしてみたが、何も起きなかった。

幸い、真実が入部してくれたので、それほど皆の負担はふやさなくてすんだ。

が、気負いが大きかった分、充実感よりも疲労感の方が強かった。これで一区切りついた、という寂寥感もあるのかもしれない。

「うー、まだ片付けもあるんだし、気合い入れなくちゃ！」

自分に言い聞かせるように、ひとりごちて、軽く伸びをする、と。人の気配を感じて振り向いた。

てっきり、部員の誰かが早めに戻ってきたのかと思ったが。

「もう、おしまいですか？」

声を掛けて入ってきたのは、1人の若い男性。

「……」

「あの？」

「あ、大丈夫です。どうぞ！」

思わず言葉を失うほどの、美しい青年だった。

癖のない黒髪を、後ろは襟足辺りでカットされているが、前髪は顔が半分隠れてしまうほど長く伸ばしている。

片側はそのまま、左側は無造作に耳ばさみで後ろに流している。見え隠れする目元は切れ長で、唇がやや薄めなのが、酷薄そうな

印象を与え、何処と無く淫靡な感じもする。

夕陽の差し込む中、その人の姿形は、より一層濃い影を落とし、顔の陰影が際立って、ただならぬ雰囲気漂う。

禍々しい美しさ。

黄昏の中に現れた、魔性の美貌。

「あの……」

「……あ、はい？」

「何だか部屋が薄暗くて。絵が良く見えないんで、電気付けてもいいですか？」

「あー！すみません！」

慌てて出入り口付近にある室内灯のスイッチを入れる。

パツと室内が明るくなり、夕闇は消える。

……普通の、人よね？

電灯の明るい光のもとで見る彼は、確かに際立った顔立ちではあったが、禍々しさなど微塵もなかった。

……夕暮れのせいかしら？

熱心に作品に見いる姿は、好ましいとさえ言える。

ふと、男性の足が止まった。

1枚の絵の前で、ジッと佇み、長々と見入っている。

「……三上、加奈」

「はい？」

唐突に名前を呼ばれて、反射的に返事をしてしまった。

「あ、すみません……あなたが三上さんなんだ？この絵の」

男性が振り向いて、ニッコリと笑う。

彼が見入っていたのは、加奈の作品だった。

美矢をモデルにした、鉛筆デッサンのみの、シンプルな肖像画。新入部員歓迎(?)のデッサン大会で書いたものだった。

「いい絵だなんて、思ってた」

「モデルがいいから……」

デッサンのみに留めたのは、色をいれた、キチンとした作品とし

て、仕上げる自信がなかったから。

時間的なことではなく、自分の技量に自信が持てなかった。

いつもなら、多少無理目でも挑戦してみるのに、この絵だけは何だかこれ以上手を加えるのが躊躇われ、結局デッサンのままにした。そのままお蔵入りも残念なので、定着液をかけ、展示してみたのだが。

「確かにモデルの子は美人みたいだね。本人を見てないから何とも言えないけど、きっと、凛とした、芯の強い子なんだろうね。でもどこか脆い部分も感じる……」

「……そうですね」

それは、美矢の気質をピタリと言い当てていた。

意志が強く、責任感もあり、良くも悪くも他人に左右されない。だけど、世間なれしてないと言うか、兄の和矢に比べて柔軟性が足りない。

そんな不器用な所も加奈は可愛いと思うのだが、美矢自身は、その為に起きる大小の摩擦に思い悩んでいる節がある。

おまけに、自分で抱え込んでしまっている。

先日の騒動でも、叩いたのは良くないが、俊の言っていたことは間違っていない。

幸い異が気が付いて知らせてくれたからよかったものの、場合によつては、ケガくらいではすまなかったかもしれない。

誰かに助けを求めることも必要なのに、美矢はそれをしない。

日本と海外を行ったり来たりで、今まで自力で何でもやらなければいけなかったのか？

それは和矢も同じはずなのだけど。

兄の負担になりたくないと思っているのか、それとも、助けを求めることが出来る程、信頼できる者が周りにいなかったのか。

……オイタワシヤ、ワガキミ……。

……………。

え？

どこからか悲しげな声が聞こえた。

気のせい…………？

「…………この子は、美術部の人なんですか？」

ぼんやりしていると、再び男性が話しかけてきた。

「…………あ、そうですね」

慌てて答えて、彼の興味深そうな眼に気付く。

…………やっぱり、気になるのかな？

誰が見ても文句なしの美少女だもんね。

加奈は、自分も十分文句なしの美少女の範疇に有ることを、あまり自覚していない。

「そう、彼女と仲がいいんだね」

紹介してほしいなんて言うんじゃない…………。

何となく、加奈は不快な気分だった。

そりゃ、美矢ちゃんは可愛いけど…………。

「ナンパはお断りします」

思わず口にして、加奈は後悔した。

まだ、何とも言ってないのに、変なこと言っちゃったよ…………。

加奈の言葉に、彼は一瞬鼻白んで、それからクスリと笑った。

「一目惚れなんだけどなあ」

加奈は胸の奥がチリチリするのを感じた。

何だか息苦しい。

「君の絵に」

美矢の肖像画を見て、それから。

「それから、君に」

男性は、ジッと、加奈の目を見つめた。

魅入られたように、加奈は、彼の瞳を見つめ返した…………息をするのも忘れてるほど、一心に。

$$\begin{array}{r} > \\ & i \\ & 1 \\ & 9 \\ & 5 \\ & 1 \\ & 5 \\ \hline & 2 \\ & 4 \\ & 8 \\ & 0 \\ < \end{array}$$

第3章 黄昏の魔性―3

なんだか、ヒジョーにビミョーな空気ですな……。

廊下で待機していた真実は、中の人間に気付かれないよう、そう
つと、息を吐いた。

一休みして早めに戻ってきたのはいいものの、展示コーナーでは
何やら色っぽいやり取りが行われていて、入るには入れない状況だ
った……真実に。

「一目惚れなんだけどなあ……君の絵に……それから、君に」

やだなあ、もう。

がっかりさせておいて、嬉しがらせを言うなんて、なかなか小技
を使うじゃないですか。

うつとりと男性を見つめる加奈の姿に、真実はやれやれ、と心の
中で溜息を吐いた。

いいように転がされているよ、お嬢ちゃん。

あれだけの美少女なのに……だからか？

高根の花過ぎて、ろくな恋愛アプローチを受けていないから、あ
の程度の手管でころっとまいってしまふ……実は恋愛初心者マーク
だったんだ。

「これ、よかったら連絡して」

男性が室内に置いてあったアンケート用紙に何かを書き込んで、
加奈に渡す。

ケイ番とメアドかな？

しつこく加奈のを聞き出そうとしないところが、余裕じゃないで
すか。

その辺の紙に、思い立ったようにちゃちゃつと書くのも、とりあ
えず、ッて感じで、計画性がないところが、むしろ計画的みたいな。
心の中でひとりツツコミしていると、男性が廊下に出てきた。

「あ、ごめんね。入れなかったね」

ニコ、ツとほほ笑むその笑顔は、朗らかを通り越して、妖艶とさえ言えた。

「あ、大丈夫です」

そっか、こちら辺が、加奈のストライクなんだ。

艶があるとはいっても、ちょっとダーク入っていて、和矢君とはある意味対極だなあ。

「あのですね」

その美貌にも臆せず、真実は話しかける。

「泣かせないで下さいね」

「……？」

「一応、私も彼女のことは、大事なもんで」

じゃあ、つと、真実は室内に入っていく。

「……どこまで、わかっているのかな？」

口元をゆがめて、男性はひとりごちる。

その瞳が、妖しくきらめいた。

一般公開の時間が終わり、後夜祭までの時間は、簡単な片付けに当てられている。

明日の午前中に本格的に片付けることになっており、教室を使用した部やクラスは、適宜施錠してよいことになっているので、美術部も展示物はそのままにして、入口に張られたポスターや装飾を片付けるだけの予定だった。

「ポスターと飾りはひとまとめにしておけば、いいですか？」

「……あ、そうね。この段ボール箱使って」

簡単な片付けのはずなのに、肝心の加奈が心ここにあらずで、イマイチテンポが悪い。

「……加奈先輩、どうかしたんですか？」

珠美が真実にぼそっと、訊ねる。

「さあ、疲れてるんじゃないの？」

すつとぼけて、真実は言葉を濁した。

恋の病に付ける薬はないとはいえ、重症だ。

「とりあえず、室内に入れておけばいいでしょ？細かいことは明日にしよ」

美術部では新参者だが、文化祭は経験している。

外回りだけ元に戻しておけば、明日でも間に合うはずだ。

一応3年生も他の2年生もいるのだが、右往左往しているきりで、役に立たない。

2年生とはいっても、やはり新参の和矢も、勝手が分からず、とりあえず言われるままに異と校内のポスターを回収しに行っている。「こういう時って、高天君なんかは真面目に参加するものだと思うたわ」

いつまでたっても姿を現さない俊に、真実は幻滅した気がして、つい愚痴をこぼした。

一応、生徒会やクラスの分担がある場合は、そちらを優先してもらっているが、俊はどちらにも当てはまらない。

「ねえ、三上さん？」

「……あ、ううん。いつもはとても真面目よ。どうしたのかしら？」
やっと、気持ちが切り替わったのか、目の色が少し落ち着いていた。

「後夜祭には出ないかもしれないけど、片付けには来るはずなんだから」

「そうですよねえ。斎先輩ならともかく、そういうところ、高天先輩はきっちりしてるし」

首を傾げる珠美に、美矢も同意して頷く。

引き合いに出されたことには気にも留めず、斎も頷いた。

「まあ、片付けの方はもうこれでいいんだけど……遠野君と巽君が戻ってきたら、とりあえず解散しましょ。後で、教室に行ってみるわ」

加奈の言葉が終わるか終わらないかのうちに、和矢たちが戻ってき

た。

「どうしたの？」

皆の微妙な空気を感じて、和矢が訊ねる。

「兄さん、夕方高天先輩に会った？」

「えっと、2時に当番で交代して……その後、吉村君と講堂の方に歩いて行くの見たけど。そういえば、それっきり見てないなあ」

そう言って、携帯電話を取り出す。

「あれ、高天君、ケイタイ持っていないんじゃない？」

「うん。でも、吉村君、あるから」

いつの間に親交を結んでいたのか、吉村正彦とアドレス交換していたらしい。

「……あ、吉村君？高天君、一緒？……いや、こっちはいない……うん、ありがとう」

電話を切って、和矢は首を振る。

「片付けがあるから、って別れたきりだって。もう、30分以上前」
「……それって、変じゃない？私も三上さんも、その前からここにいたけど、高天君、来てないよ？」

不安げに、真実がつぶやく。

何か、ある。

何かが、起こっている。

「……私、ちょっと……」

それだけ言うと、真実は廊下に飛び出した。

「きゃあっつ！」

飛び出した途端、何かにぶつかった。

「……何……マリカじゃない？あんた、何やってんの？」
ぶつかったのは、現在絶交状態にある、谷津マリカだった。

「……あの……」

いつもの高飛車さは鳴りを潜め、言葉に詰まっている様子は、しおらしい。

「丁度良かった。聞きたいことがあるの。……あんた、高天君に何

かした？」

真実の知る範囲で、高天俊に危害を加えようとする人間……もともと黒に近いのは谷津マリカだった。

もちろん、マリカ一人でどうにかできるわけもないし、マリカだって、一人で何かする気はないだろう。

この間だって、直接本人に手出しはできないから、珠美を狙ったわけだし。

「……私、何もしてない！……してない、けど……」

「けど？」

真実が詰問すると、観念したように、マリカが口を開く。

「さっき……被服室行こうとしたら、3年の、不良っぽい人達が、絡んできて……お前、美術部員だろ、って。違うって、言ったんだけど、だったら、誰でもいいから、美術部の女呼び出せて……腕掴まれて、痛くて……だから、真実に電話しようと思ったんだけど、そうしたら……」

ぽろぽろ泣いて、マリカは、言葉に詰まる。

「そうしたら？」

加奈が、優しい声音で、促す。

「……高天君が、通りかかって……3年生が、好都合だ、この女に手出しされなくなったら、一緒に来い、って……私、腕ひねられて、『骨折るぞ』って言われて、思い切り悲鳴上げたの……そうしたら、高天君が、手を出すなって……ついて行っちゃった……」

怯えて、壁に寄り掛かってへたり込んだマリカの顔のすぐ横を、残った3年生が力いっぱい蹴りつけ、怯えるマリカに対して、冷たく言い放ったらしい。

『誰かに言ったら、壁じゃなくて、お前を蹴るからな』

「……怖くて……どうしたらいいかわからなくて……」

見れば、半袖から延びた左腕に、痛々しい指の痕が、赤くくつきに残っていた。

全くの作り話、とも思えない。

「でも、教えに来てくれたんだ？ どうして？」

マリカは、美術部にも、高天俊にも、恨みを抱いているはずだ。全面的に信用していいか悩んで、真実は訊ねる。

「……テキだったの……」

「……は？」

「素敵だったの、高天君。とても落ち着いて、堂々としていて。関係ない私のために、身を呈してかばってくれるなんて……」

涙でぬれた瞳が、熱っぽくきらめく。

……嘘はない様子である。

「まあ、高天君なら、ねえ？」

ちらりと目をやれば、俊の性格を熟知し苦笑いを浮かべている和矢と斎の向こうで、ライバル出現とばかりに美矢が苦虫を噛み潰したように、口をへの字に曲げている。

「……とにかく、どこに連れて行かれたのか、探さない……」

一応冷静な判断を下す加奈。

「どこに行くとか、言ってなかった？」

真実の問いに、かぶりを振るマリカ。

「でも、部室棟の方に歩いて行った」

……「部室棟の方」には、理科棟も広大な旧校舎もあるじゃない！

「ま、怪しいのは旧校舎ね。……同好会で使ってるところがあるから、施錠はしてないと思うし」

加奈の言葉に、和矢が頷く。

「端から見ていくよ……皆は、ここにいて。なるべく固まってた方がいい」

「そんな！ 僕も行きます」

「……巽は役に立たない。ここで待ってろ」

ほら、つと斎が携帯電話を巽に向って放り投げた。

「和矢、番号入ってるよな」

「……俺にも教えてくれよ」

振り向くと、正彦が出入り口に立っていた。

「俊に何かあったんだろう？」
……遠くで、後夜祭開始を知らせる花火の音が、鳴り響いた。

第四章 凍てつく瞳 1

1

「……計画は、予定通り。……ああ、あっけなく」

薄闇の中、ボンヤリと浮かび上がる、人影。

既に日が沈み、月も雲に隠れている。

携帯電話のディスプレイだけが、唯一の灯り。

「後夜祭の騒ぎで、皆うかれているから、大丈夫」

口角を上げて、ニヤッと笑う。

「……それより、そっちの手配、大丈夫なんスね……いや、何も信じてないわけじゃ……はい、分かってます。じゃあ」

電話の向こうの相手に、平伏して、パチッと携帯を閉じる。

再び闇が濃くなるが、折よく月が雲から顔を出した。

窓から月明かりが差し込み、室内を照らす。

月光を浴びて、床に這いつくばっていた男子生徒が浮かび上がる。

電話をしていた男子生徒が、その背中を蹴りつけた。

うめき声をあげるのを見て、さらにギリギリと頭を足で踏みつけ

て、フン、と鼻で笑う。

踏みつけにされた男子生徒は、自分を足蹴にした相手を、力強い眼差しで、ジッと睨みつけた。

時間は、夕暮れ時にさかのぼる。

美術部の片付けに向かう途中で、耳に届いた声。

「……美術部員だろ」

「ち、違……」

「美術部に入りにしてたの、知ってるんだよ」

聞き覚えのある、男女の声と、美術部、という単語が耳に入り、

俊は足を止めた。

「今は、もう……」

「だったら、誰でもいいから、美術部の女呼び出せ。ケイ番くらい知ってるんだろ？」

「そんな……！イタッ……やめ……！」

「呼び出したら解放してやるよ」

ククッ、と男は下卑た笑いを漏らした。

「どうせなら、あの可愛い転校生か、2年の、三上っていう美人がいいなあ」

「あの人達のなんて知らない！……っ痛！」

「だったら他の女でもいいさ。一人くらい知ってんじゃねーのか！」

「やめて……痛い！……するから……電話……」

涙声で、女は懇願する。

「やめろ」

考えるより先に、俊は一步踏み出していた。

「その子は美術部には関係ない。手を離すんだ」

うろ覚えだったが、確か真実と一緒に仮入部してきた女生徒だったはず。

そう、美矢を叩こうとした、あの女だ。

思い出すのも腹立たしいが、それとこれとは話しが別だ。

怯えて泣いているのを見て、いい気味だ、と笑えるような俊ではない。

彼女がしたことは簡単には許せないが、だからといって暴力に曝されているところを知らんぷりして行くことは出来ない。

それに。

このままでは、彼女は美術部の女生徒……おそらく真実に連絡する。

真実は、予定通りなら加奈と一緒にはずだし、もしかしたら美矢や珠美もそばにいるかもしれない。

人を放っておけない加奈の性格を考えると、男達の思惑通り呼び

出されてしまう恐れが、なきにしもあらず。

案外気が強い美矢とて、可能性がなくもない。

そう考えると、余計このまま放置することは出来ない。

「……これは、手間が省けたってもんかな？」

脅していたのは、以前美矢と珠美に不埒な行いをしていた不良の片割れだった。

前と違うのは、後ろで1つに縛っていた茶髪を、今は短髪にし黒茶の斑になっていることだった。

そしてもう1つ、以前のように俊の眼差しに怯む様子がないこと。居丈高で、自信に充ちていた。

「ちよっと一緒に来てもらえるかなー」

不気味なくらい明るい口調で言われて、俊は怖気がした。悪い予感がする。

立ち去れと、どこからか警告が聞こえた。

けれど、俊は無視して、なおも対峙した。

「俺に用があるなら、彼女はもういいだろう？手を放してくれないか？」

「いいとも。……お前が反抗しないと分かれば、なあ？」

背後に気配を感じ、俊は振り返る。

何かを手に握りしめた別の男が、俊に殴りかかってきた。

とっさによけた俊の耳に、女生徒の悲鳴が届く。

「大人しくしてないと、こいつの腕、折っちまうよ？」

女生徒の腕をねじり上げて、男は言った。

「それとも、関係ないか？だったら、これから別のやつらに、美術部員襲わせてこようか？」

空いた手で携帯電話を操作しながら、勝ち誇ったように告げる。

「……！」

言葉に詰まって、動きを止めた俊は、その瞬間電撃を感じた。

「ちよろいもんだな……正義感ぶるからだぜ？とっとと逃げればいいのによ」

スタンガンを手にした別の男の、嘲笑う声を聞きながら、俊は、意識を手放した。

気がつけば、後ろ手に縛られて、この暗い部屋の中だった。

天窓から、かすかに夕日が差し込んでいた。

まだ、それほど時間は経っていない様子だ。

カビ臭さが、鼻につく。

目が慣れてくると、ぼんやり部屋の内部の様子が見えてきた。

三方を壁に囲まれた、狭い部屋。

角にある四角いものは、おそらくロッカーだろう。

さらに目を凝らすと、天窓の下にドアが見え、向いの壁だと思っ
たところには、窓があった。

西向きに出入り口のある、ロッカールーム……思いつく場所は、
ひとつ。

かつて体育館改築の時、旧校舎の並びに作られたプレハブの部室
棟。

敷地の関係で、道路に面したフェンスよりからかうじて出入り
できるように作られた建物である。

窓側が旧校舎に密接していて、人ひとり通るのがやっとという近
さのため、東側の窓からは、実際にはほとんど日が入らない。

改築した体育館に新しく部室棟も作られたため、主な運動部はそ
ちらに移ったものの、部室獲得の難しい同好会や一部の文化部が一
時的に使用している……といったつ、改築からはすでに10年近く
たっており、いまだ立ち退き請求はない、というのが現状であるが。
もっとも西日が当たる、夏暑く冬寒い、急ごしらえのプレハブは、
決してよい環境とは言えない。

旧校舎が使われなくなつて、そちらに活動場所を構えるところも
多くなり、カギがかかるのが唯一のとりえで、倉庫代わりにしてい
るところが多いと聞く。

その点では、更衣室こそないものの、倉庫も活動場所も確保され

ている美術部は恵まれていると言えた……余談であるが。

「よ、目が覚めたみたいだな」

ドアが開いて、光が差し込む。

夕暮れの、薄明るい光だったが、暗闇に慣れた俊の目をくらませるには十分だった。

ドアが閉じて、再び闇に閉ざされる。

「いい格好だな。どうだ？手も足も出ないだろう？」

声しか分からないが、相手の下卑た笑い顔が目には浮かんた。

最初に女生徒を脅していた男だ。

「……彼女はどうした？」

静かな声で、俊は訊ねた。

「……こんな時までヒーロー気取りかよ。ムカつくなあ！」

男にもまだ俊の位置が把握できていないのだろう、小刻みに歩く気配がし、俊の足につま先が当たると、思い切り踏みつけてきた。

「う……」

思わずうめいた俊の声を聞いてそのまま踏みつけたまま、男は嬉しそうに言葉を続けた。

「放してやったさ。今頃、報告に言っているだろうよ」

「……どういふことだ？」

「そのままさ。高天俊クンの尊い犠牲で、自分は助かったって、ね。仲良しこよしの美術部員たちは、さぞかし心配してるだろうねー？」

嫌味なほどやさしい口調……粘りつく様な言葉に悪寒を覚えながら、その内容に俊は衝撃を受けた。

はめられた？！

悲痛な声も、涙も、演技だったというのか？

「だまされた、って思ってる？……だよな！……迫真の演技だったもんな。俺もマジにやってたし」

ククク、と笑いをこらえきれない様子で、肩を揺らす男の姿が、闇に慣れた眼に映る。

「腕に掴まれた痕がすっかりつくまでやれって言う指示だったから

な。……今頃お前のこと、探してるかもな」

「……よくも……」

キツと、睨みつける俊の眼に、月の光が映る。

日が沈み、代わりに月光が室内に差し込んで、俊の姿を浮かび上がらせた。

その姿が、光を帯びたように冷えびえと輝いて、男は息をのむ。

床に転がされているにもかかわらず、卑屈さの影も見えない、誇り高い眼差しに、気圧された。

怯えを振り払うように、男は俊の腹めがけて蹴りつける。

とっさに身をかがめて腹部をかばい、足は俊の膝を蹴った。

今度は襟首を掴んで、何度も顔を殴りつける。

「許して下さいって言え！ 助けて下さいって！ 言えよ！」

襟首をつかんだまま、俊の体を揺さぶる。

目を開けて、じっと男を見据えると、かすれた声でつぶやく。

「……誰が、言うもんか……」

その瞬間、男は渾身の力で俊の頬を殴りつけた。

ガツン、と床に打ちつけられた俊を見下ろして、ハアハアと、肩

で息をする。

鉄臭い血のおいが、鼻にも口にもあふれる。

頭がぐらぐらする。

俊は、目も開けられないまま、再び蹴りつけてくる気配を感じ、身を硬くした。

その瞬間。

RRRRRRRR……。

無機質な電子音が鳴り響く。

「……チッ」

舌打ちして、男は携帯電話を開いた。

「……あ、はい。……いや、大丈夫っすよ。……まあ、なかなか強情で……」

どうやら、目上らしい相手と会話しながら、男は壁に寄り掛かる。

「はい。すべてシバさんの指示通りに……はい」
うつろな意識の中で、『シバさん』という名前が、やけに鮮明に響いてきた。

意識を手放しそうになりながら、懸命にその名を口の中で唱える。

……そして、場面は冒頭に戻る。

電話に集中していた男は、だから、見なかった。

月が雲に隠れた、その刹那。

意識を手放すまいと、懸命に男を凝視している、半ば開いた俊の瞳が輝いたのを。

月の光にも似た、青白い、炎のような瞳を。

凍てついた、氷のごとき、瞳を。

第4章 凍てつく瞳―2

2

時を同じくして。

すでに日は暮れ、薄暗い旧校舎を、和矢・正彦・斎は探索していた。

「これで、全部の教室を回ったんだよね？……見つからないね」

まだ足を踏み入れたことがなかった慣れない校舎内で、やや疲れたように和矢はつぶやいた。

「あとは、この裏のプレハブだけど。あそこはカギがかかっているからなあ。先生に言って、カギ借りてくるしかないのか……」

うーと、気が向かない様子で正彦がうめいた。

「カギがかかっているけど、中の様子は分かる。今のところ、灯りがついているところはない」

指で西向きの窓を指さす斎。

暗くて分からないが、実はプレハブの窓側に隣接しているので、中で灯りを使えば、窓に映るはずだ、ということらしい。

「校外に出たってことはないかな？」

「それはないだろう。はっきり言って、俊が不良生徒と連れ立っていたら目立つよ。それに、俊が大人しくついて行くとは思わない。意識を奪ったのなら、ますます難しい」

あっさり和矢の考えを否定し、斎は断言する。

「って、意識を奪うって……」

剣呑な言葉に、正彦は青ざめる。

「あの女、嘘ついてるよ。まあ、俊が助けたのは、本当だろうけど。俊に惚れたなんて、嘘っぱちだね。自分の演技に、酔っているのが見え見えだった」

「じゃあ、何で、わざわざ教えに……？」

「おびき出すためだろう？」

「俺達を？何のために……」

斎と正彦の問答を聞いて、和矢がハツとする。

「……美矢たちが……！」

危ない！

飛び出そうとする和矢の腕を、斎が掴んで引き寄せる。

「大丈夫」

「だけど、あっちには女の子たちが！」

「あと、山口部長もいる」

「戦力外だろう！絵筆より重いもの持ったこともないような人は！」

「……なかなか面白いこと言うなあ。一応、イーゼルくらいは担げるだろう」

「物の例えだ！君だって、巽君は役に立たないって！」

「そう言えば、安心するだろう？」

「……？」

目を白黒させる和矢の耳に、壮大なメロディーが届く。

ホルストの『木星』……斎の携帯電話からの着信だ。

『あ、和矢先輩！見つかりました？』

まだ少女のような、巽の声が響いてくる。

「いや、まだ……そちらは大丈夫かい？」

のんきな巽の声に、和矢は拍子抜けしながらも、一応確かめる。

『はい！兄さんに、万事おつけーです！って伝えて下さい』

「……ということだけど？」

甲高い巽の声は、電話に出てない斎や正彦にも聞こえていた。

「じゃあ、こっちは引き続き俊の搜索だな」

「そうじゃなくて！……それもだけど、どういふことか説明してくれないか？」

「うん。俺もよくわかんないんで……」

怒気を孕んだ和矢の言葉に、おずおずと賛同するように、正彦も

小さく挙手する。

「めんどい」

あっさり、斎は却下する。

「……！」

和矢の背後に、メラメラと怒りのオーラが立ち上る……かのように、正彦には見えた。

まなじり
眦をつり上げる和矢を見て、斎はフツと笑った。

「いいね。笑顔魔人の和矢が、怒るところなんて、そうそう目にすることはできないからね」

……頼むから、こんな非常事態の時に、ことをややこしくしないでくれ……。

俊の氷のような眼差しには平気な正彦も、普段穏やかな和矢の、炎のような怒りには気圧された。

よく笑ってみていられるものだ……斎の豪胆ぶりに感心する正彦も、案外肝が据わっていることに、本人は気付いていない。

「まあ、珍しい顔が見られたから、良しとしよう。……僕らがいなくなったら、時間を開けずに彼女たちを狙ってくるのは、予測していたからね。だから、巽を残した。ゲームには駆け引きが大事だからね」

「……意味がよく分かりません……」

怒りのあまり、口もきけない和矢に代わって、正彦が上目づかいに訊ねる。

「まったく、サッカーだって、ボール蹴るだけじゃ勝てないんだろう？少しは頭を使わないと、頭脳プレーで負ける羽目になるよ」

「……それとこれとは関係ないだろ！」

「……つまり、オールド・メイドか」

キレた正彦を見て冷静になったのか、和矢が確かめるようにつぶやいた。

「おーるどめいど？」

「カードゲームで、最後までジョーカーを持っていたら負けるって

ゲームだよ。相手にわざとジョーカーを引かせるように、誘いをか
けたりしてね……」

「それって『ババぬき』と違うのか？」

「日本ではそう言う名前だった気がする。」

「そう。いらなと思うせておいて、実は切り札。さすが和矢。い
い表現だね」

うんうんと頷く斎に、鼻白んだ正彦が、観念したように手を挙げ
る。

「……スミマセン。頭悪いんで教えて下さい。何でババが切り札な
んですか？」

本題からどんどんずれていく正彦のために、和矢が路線を元に戻
す。

「あちらにとっては、役立たずのカードを置いていったと思ってい
るだろうけど、こちらにしたら、まんまと引かせたわけだよ。手に
した途端牙をむく、最強のカードをね」

「……つまり、巽は、役立たずなんかじゃない、ってことか？」

イマイチ、カードにたとえた意味が理解できないものの、言いた
いことは分かったらしい。

斎が、正彦に向かって頷く。

「役立たずも何も、巽は唐沢宗家そうけ次代の筆頭候補だからね」

「唐沢宗家……！」

驚愕する和矢を尻目に、正彦は要領得ない顔をして、首を傾げる。

「何それ？」

「ほら、K・1や映画のタイトルロールに、よく監修とか後援で載
ってるだろう？『唐星会総合格闘技研究所』とうせいかいって。あれが……」

「そう。でも、あれは傍流だから」

「宗家は、古武術の伝承をメインにSP養成に携わっているんだっ
け」

「よくご存じで」

「日本に来る前に、ネットでいろいろ調べたから」

「海外勤務の商社マンの息子ってのは、結構国家機密に詳しいんだな」

「……ネットに目いっぱい流出している国家機密って、機密の意味があるのかな？」

「だから半分はガセだけだな。さすがに古武術はないだろう？普通に、剣道柔道各種格闘技だよ」

斎にからかわれて、和矢は赤くなりながら、一応訊ねる。

「……じゃあ、忍術は？」

うづくまってヒーヒーと笑い死にしそうな斎を蹴り倒さなかった和矢を、正彦は誉めてやりたいと思った。

俊の行方を探しているはずの2年男子3人組が、気が付けば、うっかりコントを繰り広げてしまっていた、その頃。

美術室に待機場所を変えたはずの、美術部員の面々は、カンフー映画顔負けのアクションを見せられた心持ちで、やや呆けていた。

「で、色々聞きたいことはあるんですけど、とりあえず高天先輩の居所、教えてもらっていいですか？」

ニコニコニコ。

声変わりしはじめたものの、まだまだ『可愛い』声の、みてくれも小柄で愛嬌のある少年に、笑顔でそう問われ、ビニール紐でぐるぐる巻きにされた男は、答えに詰まった。

「ほら、せっかく起こしてあげたんだから、答えて下さいよ。……それとも、また寝ます？」

ニコニコ。

少年の笑顔に反比例して、男は青ざめていく。

「仕方がないなあ。じゃあ他の人を起こして聞きましょうか……」

少年が視線を移した先には、意識を失ったまま、同じように縛られた男達が6人、転がされていた。

「じゃあ、またお休みしていて……」

「し、知らない！どこにいるかは聞いてない！」

先ほど、一発でノックダウンされた記憶が甦り、男は慌てて、そう答えた。

「聞いてない、って言うことは、やっぱり仲間なんですね」

うっかり口を滑らしてしまったことに気が付き、男は苦虫を噛み潰したように、顔を歪めた。

「では、質問を変えます。高天先輩を連れていった相手に、連絡は取れますか？」

男は、首を左右に振り、観念したように、答えた。

「女を捕まえて、悲鳴の1つも上げさせればいいって……それを電話で聞かせるだけでいいからって……」

「……あわよくば、彼女らをモノにしよう？」

「ああ……い、いや！違う！そこまでは！……好きにしろとは言われたけど、そんな気は！」

少年の顔から笑顔が消えて、どんどん冷たくなっていくのを見て、男は慌てふためいて支離滅裂になり、墓穴を掘っていく。

「……まあ、いいでしょう。じゃあ電話番号は、分かるんですね」

男は頷き、それから慌てて付け加える。

「ただ、会話はしないキマリになってるんだ。名前も名乗らない。お互い知らない方が、後腐れがないからって」

「……間に入った人がいるんですね？」

「ああ……」

それっきり、男は口をつぐむ。

「話したくないみたいです。困ったなあ」

少年……異は、足音も立てず、美術室の出入口に近付き、バン！と一気に戸を開けた。

突然戸が開いて面喰らった様子の男が、そこに立っていた。

ハッと気が付き、身を翻すが、一瞬早く、異が取り押さえる。

「見覚えがありますね。確か3年生の……志摩^{しま}さんでしたっけ。相棒は須賀^{すが}野さんでしたね」

「な、何で……」

「そんなの当たり前じゃないですか！危険人物は即調査して、弱味握っておかないと」

さらっと、あまり当たり前でない上、恐ろしい言葉を言っただけで、巽は志摩の腕を軽く叩いた、ように見えた。

「えっ？」

途端、志摩の両手がダランと下がった。

「皆さん大勢で来るから、紐を大量に使っちゃったんですよ。勿体無いから、志摩さんは、これでね」

「な、何したんだ!？」

「えっと、簡単に言えば、一時的に肩から下の運動神経麻痺させたっていうことかな？あ、大丈夫。用が済んだら戻しますんで。でも、僕しか戻せないんで、逃げたりしないで下さいね」

「ひっ……!」

「もし逃げたいんなら、足の方もやっちゃいますけど」

「に、逃げない！逃げたりしないから、治してくれよう……」

涙声で懇願する志摩に、巽はニツコリと頷いた。

「じゃあ、高天先輩の居場所を教えてください」

背筋が凍るような、という喻が全くふさわしくない、あどけない声に、文字通り凍りついた志摩を見て。

……何だか気の毒に思ってしまった、加奈と真実だった。

第4章 凍てつく瞳―3

「まったく、遅えな。何やってんだ」

美術室に様子を見に行った志摩が、いつまで経っても戻って来ないことに、須賀野は苛^{すが}立っていた。

本来なら、美術室を襲った別動隊が須賀野に渡された連絡用の携帯電話に電話をしてくる手筈だった。

須賀野としては、高天俊を思う存分痛め付けることが出来ればそれで良かった。

だが、馴染みの店で知り合ったシバ、という男から、高天俊を恨んでいる人間から、彼を心身ともに打ちのめして欲しいという依頼があり、一枚噛まないか、と誘われた。

謝礼金の額にも惹かれたが、何より俊を散々痛め付けることが出来る、オマケに後始末はシバの組織でやってくれる、という美味しい話に、須賀野は躊躇もなく飛び付いた。

俊に対して怯えている様子の志摩は、初めは躊躇していたが、ここまで聞いて置いて協力しないつもりか、と半分脅しかけて手伝わせた。

『でも、殺っちまうのはマズインじゃあ?』

『そこまですらないさ。別の奴らに女を拐わせるから』

『つていうと?』

『出来れば、ソイツが大事にしてる女がいいな。あてはあるか?』

『まあ、一応』

『大事な女の、あられもない写真を学校やネットでばら蒔かれたくはないだろうなあ。そういう男なんだろう?』

須賀野の役目は、高天俊を拘束し、心身とも痛め付けること、その際、彼が大事にしている女の悲鳴を聞かせて、酷い仕打ちを受けていると思わせること、その2点だった。

その際に、別動隊として動く輩とは接触しないことを条件に出さ

れた。

本来なら、志摩に様子を見に行かせることも禁じられていたが、いつまでも電話が入らず、痺れを切らせて、須賀野が命じたのだ。初め躊躇した負い目があったか、今回の件に関しては、志摩は素直に指示に従った。

その志摩も、戻って来ない。

後夜祭の終わる前に片を付ける予定だった。

学校内がざわめいている内なら、多少の悲鳴はかき消されてしまいうだろう。

だが後夜祭が終われば、校内の見回りもするだろうし、こちらはともかく、美術室で何かトラブルが起きていれば、すぐに見つかってしまう。

せっかくシバが後始末を請け負ってくれると言うのに、公になってしまつては元も子もない。

下手をすれば退学モノだ。

多少羽目は外してしまつたが、キチンと卒業して、大学へも進学するつもりだった。

国公立、一流私大などは望むべくもないが、とりあえず大学と名のつく所になら滑り込める自信はあった。

大学に入りさえすれば、そこからリスタートできる。

中学の先輩に誘い込まれてうっかり道を踏み外したが、元々は優等生だった。

初めはカッコイイと思っていた先輩が、ヘイコラ頭を下げて安い時給でこき使われている姿を見るたびに、あんな風にはなりたくないと思うようになった。

どうせ、道を踏み外すなら、シバさんみたいに、他人を顎で使つて、金を動かせるような、大悪党に……。

「おい、起きてるか？」

須賀野は、俊の足を軽く蹴った。

モゾッ、と動く気配がする。

「今頃、俺の仲間が、美術室を襲っている」

ピクン、と俊の体に緊張が走ったのが分かった。

当初の計画では、電話で声を聞かせ、リアリティを持たせて、信じ込ませるつもりだった。

俊の大切な女性が、汚される。

俊本人を傷付けるより、よっぽど効果的に彼をボロボロにできると、シバは言った。

もちろん、実際に手を汚す必要はない。

俊に、そう思い込ませることが出来ればよい、と。

俊の性格なら、事実があったかどうかなど、決して本人には訊ねはしない、と。

……その時、なし崩しに奴等が女性に何かしても、須賀野達の責任ではないから、と。

そう、自分は、俊をちよつと脅かすために、実際には起きていない出来事を、話して聞かせただけだ。

たまたま、美術室で、似たような事件が、起きていたとしても、関係ない。

「お前が惚れているのは、どっちなんだ？」

何も起きていなかったとしても、元々、そういう計画だ。

ようは、俊に信じ込ませれば、いいだけ。

「仲のいい、三上っていう美人か？それとも」

俊が、そろそろと体を起こした。

「あの、転校生の妹か？」

ヒヒヒ……。

下卑た笑い声が、須賀野の口から漏れる。

「どっちでもいいか。……あのマリカって女、こえー女だぜ。自分を美術部から追いだした三上と、馬鹿にした転校生の妹に、復讐したいってさ。めちゃくちゃにしてくれるなら、協力するからって。邪魔な男共連れ出すために、痕がつくほど、腕を掴めっていつてさあ……」

起き上がった俊を、須賀野は足蹴にし、仰向けに床に倒した。
俊の喉元をグリグリ踏みつける。

「あーあ、俺もこんな所でコイツ構ってないで、アッチに行けば良かったよ。さぞイイ軀してんだろな」

その時、携帯電話が、鳴った。

「お、きたきた、……！」

電話を受けようとして、須賀野は、突然浮遊感に襲われ、気が付けば尻餅を付いていた。

「……ってえ、何す……」

——その刹那。

ただ、男の眼に焼き付いたのは。

……凍るような、燃えるような、青白い閃光。

その向こうに、一瞬、見えた、凍てつくような、氷の、眼差し……それだけだった。

時は、わずか遡る。

「……高天は、プレハブ棟にいる」

文字通り腕も上がらず、泣きべそをかいで、志摩は告げた。

「プレハブ棟？」

「旧校舎の裏にね、部室として使っている建物があるのよ」

1年生の巽にはピンとこなかったらしく、首を傾げていると加奈が助け船を出した。

「ああ、あれ、部室だったんですね。倉庫だと思ってました」

ま、実質、倉庫みたいなものだけどね。

引き続き詳細な位置を聞き出そうとする巽を見つめながら、加奈は疲労感を覚えて、本日何度目になるかわからない溜息を吐いた。

変わり者の兄・斎と違い、人懐こい、でもどこにでもいる少年だと思っていた巽が、美術部に押し入ってきた無頼の輩……それほど歳は変わらないだろうが、巽の一回りも二回りも大柄な男達……を

次々とのしてしまい、志摩に至っては、訳の分からない技で、身動きできなくしてしまった。

驚いたのは、自分と美矢くらいで、山口部長達3年生は、全く動じてないし、珠美は驚きもせず『行け！いいぞ！』と声援を送っていた。

「武術と名のつくものは、何でもござれなんです」

訳知り顔で珠美は、彼が実は有名な武術家の跡取りだと、そっと耳打ちしてくれた。

「よく知ってるわね」

加奈が感心すると、えへ、っと赤くなった。

どうやら加奈が知らないうちに、密かに思いを通じ合わせていたらしい。

「で、今回裏で仕切っていたのは、結局誰なんですか？」

「……それは……」

「まあ、今はいいでしょう。三上先輩、これで和矢先輩に電話して、場所教えて下さい。プレハブ棟の北寄り3番目の部室です。文芸同好会の隣だそうです」

そう言っただけで加奈に携帯電話を手渡すと、巽は縛り上げた男達の所持品を点検し始めた。

全員分の携帯電話を探し出し、片っぱしからチェックしていく。

「……うん、そう。お願い……このまま、つなげておいて」

加奈が用件を伝えて、電話を切らずにしていると、巽が携帯電話を見比べて、頷いていた。

「わかったの？」

「はい、たぶん。同じ未登録の番号が、リダイヤルで、しかもほぼ同じ時間帯に入ってますから。全部ワン切りしてますし。着信歴もない」

大人数で同じ番号を控えるなら、登録して赤外線やメールで送信するのが普通だ。

全員が同じ番号を手で入力するという、一見無駄な手順に、なる

べく記録を残さない意図を感じた。

間違って消してしまってもいいように、何人かの携帯電話に打ち込んだのであろう。

言われれば分かるが、それをパッと見ただけで探り当てる巽の情報分析力というか、推理力に加奈は感心した。

巽が、携帯電話の1つを操作し、発信する、と。

珠美の悲鳴が上がる。

「加奈先輩……！」

突然、雷に打たれたように、加奈はのぞける。

カッン、と斎の携帯電話が、床に落ちた。

床にへたり込んだ加奈を、美矢が介抱する。

「先輩……！」

震える加奈の肩を、美矢は両手で支える。

すがるように、加奈が美矢に抱きついた。

「……さま、……が……」

かすかに、美矢の耳に届く、声。

そのまま美矢の腕の中で、すうっと、加奈は崩れ落ちた。

意識を失った加奈の体をしっかりと抱きしめて、美矢は、加奈の残した言葉を、頭の中で反芻した。

『ヒメサマ、ワガキミガ』

……………星が、またひとつ、流れ落ちた

第5章 疾風の帰還者 1

1

「へえ、修学旅行は京都なんだ？」

後10日もすれば8月が終わる、と言う頃。

首都圏に比べて夏が短いこの地方は、夏休みも短い。

残暑厳しいこの時期でも、夜になると風はすでに秋めいている。

冷え性の弓子は、綿毛布にくるまって、学校からのおたよりに目を通していた。

「う、さむ……」

元々生まれ育った土地なのに、大学進学後から都会で過ごした10数年のうちに体は暑い夏に馴染んでしまったのか、それとも年のせいなのか（とは、考えたくもないが）、帰郷してからここ数年、夏がづらい。

一日中暖かくさえしていれば、ぬくぬくとやり過ごせる冬と違って、昼間の暑さで熱を帯びた肌を夜の冷気が包む様は、涼しいを通り越して、寒い。

コトン、と目の前のテーブルの上に、マグカップが置かれた。

「そんなこと言ってて、昼間はクーラーなんか使うから、身体の芯が冷えてるんですよ。適度に栄養と水分摂って、キッチンと汗をかけば、余分な水分は出ていくから、そんなに冷えないと思いますけど」

もっと暑い国で生活していた甥っ子からお説教をいただくのは情けないが、今はマグカップに心を奪われているので気にならない。

中身は、甥っ子特製のスパイスミルクティーだ。

「でも、これのおかげで、この夏は乗りきれそう。去年よりはずっと体が楽なもの」

彼の入れるミルクティーは生姜やシナモンなど、体を温めるスパ

イスが入っている。

弓子も真似してみたが、どうやっても、スパイスの味や匂いがくどくなってしまい、美味しくない。

気にならない程度にスパイスを控えると、体がちっとも温まらない。

「おいしい……やっぱり、和矢の入れたお茶が一番」

「誉めてもらうのは嬉しいけど、生活習慣も見直した方がいいです」
にっこり笑いつつ、手厳しい意見を述べる甥っ子を、弓子は身をすくめるようにして眺める。

……顔は兄さんには似てないけど、性格はそっくりだわ……。エキゾチックな美貌はおそらく母譲りなのだろう。

華がありすぎる、と言ってもいいくらい綺羅びやかな顔立ち。

ともすると艶な雰囲気になりかねない華やかな風貌が覆い隠しているが、実は結構正論を吐く、生真面目な性格だったりする。

ただ、その美貌と人当たりの良さが、よく言えば柔和に、悪く言えば軟弱に見せてしまう。

……怒ってるように見えないところが、怖いよね、後々……。

兄の姿を甥っ子の中に見つけて、弓子は体だけでなく心も温かくなってくる気がした。

……それは、もう取り戻せないものだと思っていたから。

今まで天涯孤独のつもりだった弓子は、現在は一応、和矢と美矢の保護者、ということになっている。

フリーのルポライターとして、そこそこの収入はあるものの、実際生活を支えているのは、亡き父の代までは代表取締役をしていた会社の、株式分配金である。

創業者の直系であると言うだけで、実務には全く手も口も出していないが、一応全体の35パーセントを保有する大株主になる。

今のところ安定した経営状態ではあるが、いつどうなるかわからないご時世である。

本業の方だけでも食べていけるように、せつせと仕事をこなさないといけない。

和矢と美矢の父……弓子の兄の真矢が、遺産を放棄したため、会社の株式をはじめ、亡父の名義の財産は、そっくり弓矢に引き継がれた。

しかし、父の晩年の子である弓子の成人を待たずに、父は亡くなり、本来跡を継ぐと思われていた兄は、家を捨て、海外にいた。

会社の実権は、当時の役員に引き継がれている。

別にそのことに異論はないものの、いつどうなるか分からない……しかも、自分ではどうにもできないものに頼っているのは、何だか腰が座らなくて落ち着かない。

まだ30を過ぎたばかりの……真矢とは10歳程年が離れているのだ……弓子であるが、一応世間と言うものを見てきたつもりだ。

客観的に、会社の状態が、決して良好でないことも知っている。

和矢と美矢の生活費や学費は、潤沢過ぎるくらい振り込まれているため、その点で弓子には負担はかかっていない。

かつて賃貸の事務所として使っていた、この建物を住居用にリフォームする費用も、実は出してもらった。

不況で借り手が安定しないまま、アパートを借りているより、いっそここに住んでしまった方が経済的だと、事務所用のまま、使っていたのだけど。

元々住んでいた家は、相続税の支払いに充てるため、処分していた。

株式を売却しても良かったが、家の維持費を考えると身軽な方が良いと、考えたのだ。

母が生きていれば、家を処分することはしなかったかも知れないが。

まさか、和矢と美矢が一緒に住むようになるとは、予想だにしていなかったから。

だが、今考えれば、景気のいいうちに株式の方を処分しておけば

良かったかも、とも思う。

天涯孤独のつもりだったから、身軽な方を選んだけど。

和矢と美矢という身内がいると知っていたら、こんな無機質な建物じゃなくて、広い庭のある、あの家を遺してあげたかった……。

「弓子さん！眠っちゃダメですよ！」

和矢の声で、ハッと気が付く。

いつの間にか、居眠りしていた。

まだ若い弓子を、叔母さん、と呼びにくいらしく、和矢は『弓子さん』と呼ぶ。

「まだ×切前の原稿が仕上がっていないって、言ってませんでしたか？」

「……言っていました」

優秀なマネージャー兼甥っ子に追いたてられるように、仕事部屋に戻り、弓子はパソコンを立ち上げる。

書きかけの原稿が保存されたフォルダを開き、呼び出そうとして、新着メールのアイコンに気が付いた。

「……？珍しいところから来てるなあ……」

タウン雑誌の編集をしていた頃、取材協力したことのある旅行雑誌の出版社からだった。

「ふーん、面白そうな企画じゃない……？」

各地の有名観光スポットの影に隠れた、知る人ぞ知る穴場を発見する、をコンセプトに新しい情報誌を立ち上げる、という。

その為、地元在住のライターにガイド兼ルポを依頼し、より地元目線の観光案内にしていくな、については貴殿に原稿を依頼したく、と言うのがメールの趣旨だった。

「それでね、打ち合わせしに、こっちまで来てくれるんだって」
翌朝。

登校前の和矢と美矢を捕まえて、弓子は報告した。

「来週の水曜日、夜遅くなるけど、お願いね」

「構いませんけど……飲みすぎないように」

やんわり和矢に釘を刺され、弓子は苦笑する。

以前、和矢達が文化祭で遅くなるのをいいことに友人と飲みに出掛け、気が付いたら午前様になっていたのだ。

あの時は、和矢から何度も携帯電話にコールがあったのに気が付かず、悪いことをした。

「そういえば、彼、元気？」

「は……？」

突然話題が変わり、和矢は鼻白む。

「ええと、俊君、って言ったっけ？怪我した子」

「ああ、元気ですよ。大したことなかったし……あの時はありがとうごさいました」

深々と頭を下げられ、弓子は居心地が悪かった。

正直、酔っぱらっていて、ほとんど役には立っていなかったのだから。

やったことと言えば、和矢と口裏合わせたことぐらいで……。

事情がありそうだったので深く追求しなかったけれど、学校に俊の親の振りをして休みの連絡を入れたのと、後日俊の家から連泊のお詫びとお礼の電話をもらった時に話を合わせただけ。

……常識的な保護者としてはいささか問題がないでもない行動かも知れないが。

そこらへんは、弓子らしいおおらかさでノープロBLEMとしていた。

慣れない土地にやってきてどうなるかと気を揉んでいたが、どうやら親しい友人も出来て、学校生活を楽しんでいる様子。

それだけで弓子は満足だったから、野暮な干渉はしないつもりだった。

和矢とそう年の変わらない頃に家を飛び出した兄を思うと、このまま平穩無事に高校生活を楽しんでもらいたい……。

そんな弓子のささやかな願いが、やがて脆く崩れていくことに、まだ彼女は気が付いてはいない。

平和な日常が、終わりに近づいていることに。

奇しくも、その一端を担うのが、弓子自身であることも……。

弓子は……そして、誰も、気付いては、いなかった。

第5章 疾風の帰還者 2

2

「へえ、弓子さんて、そんな仕事の依頼が来るんだ？ 私もよく読むよ。あの雑誌」

放課後。

美術室でイーゼルの修理をしながら、真実は和矢に相槌を打った。美術的才能は未知数だったが、大工仕事の才能はあるらしい。

夏休み前に、美術準備室の隅で修理の当てもないまま放っておかれた、壊れたままのイーゼル等の備品を見つけて、見事に復活させてみせた。

それ以来、暇を見ては壊れかけの備品を修理するのが真実の役目になった。

加奈に勧められミニチュア家具作りなどの木工模型にも挑戦している。

「さすがだなあ。カッコイイ！」

「森本さんって、よっぽど弓子さんが気に入ったんだね」

「気に入っただなんて！ もはや、あこがれの人ですよー！ 素敵だよね。気風がいいっていうか、クールビューティ？ っての」

「……森本さん、多分それ、使い方違って……」

「いいの！ だいたい、ああいう場面で、動じないっていうか、ドンと構えてるって、すごいよ？ 手助けはするけど口は出さないなんて……」

「……どっちかと言うと、鉄火肌の姐御みただけ……」

クールビューティとは言わないな、ぼそつと斎が言うのを、珠美がうんうんと頷いて、同意を示す。

「森本先輩が美矢ちゃんの叔母様をお気に入りなのは分かりますけ

ど、あのことはオフレコですよ？」

「分かってるって！私だって、知られたくないし……」

夏休み前の文化祭で起こった事件のことは、結局公にはなっていない。

学校で隠匿したわけではなく、学校側にも知られていないのだ。

美術室で捕えた連中を、後々唐沢家で再度締めあげ……もとい話を聞いたが、結局シバなる者の素性は分からなかった。

直接会って話をしたのはずの志摩でさえ、「これと言って特徴は思いだせない」平凡な風貌であるらしい。

『前髪伸ばしてたから、目元や何かはよく見えなかったし……でも、今時そんな奴、普通にいるだろう？』

そういう髪型の間人を、真実は1人知っているが、彼はとても平々凡々とは言えない風貌だったし。

彼……加奈を一目で虜にしまった、美貌の主。

その後、加奈との関係はどうなったのか、聞いてみたいところだったが。

加奈と言えば、もう一つ気になるのが、あの時の、加奈の異変。

すぐに意識を回復したし、本人も何が起こったのかよくわからない風だったから、周りの皆も言及しなかったが。

加奈の様子に変化はないし、俊を心配するあまり起きた一過性のヒステリー的なものだろうと異は言っていたが。

たが、たが、たが……あー、気になることばっか！

本来ウジウジ考え込むことが苦手な真実であり、気になると知りたくてたまらない性分なのだが、藪蛇になりそうなので、口をつぐまざるを得ない。

一番の大きな蛇は……須賀野の行方だった。

俊の居場所を突き止めた和矢達が、プレハブに到着した時、悲鳴を上げて飛び出していく男……おそらく須賀野……を見ているから、

俊が彼をどうにかしたとは思えない。

現に、その時俊は、手足を縛られた状態で、意識を失うほど痛めつけられていた。

幸い骨や内臓には異常はなかったが、傷だらけで、体中あざだらけだった。

とりあえず一番近い和矢の家に運ぶ時も、あまりに無残な姿にタクシーを使うことも出来ず、結局事情を聞かずに動いてくれる唐沢家の車で送ってもらった。

（いつそ唐沢家に行って手当をしてもらった方が早いんじゃない？とも、真実は思ったが。事実、手当は結局唐沢家の主治医、という人が往診してくれたのだし。それでも遠野家に運んだのは、ひとえに端緒は自分だからと、美矢が療養場所を譲らなかったからである。その時、遠野兄妹の叔母である弓子に出会い、余計な詮索も干渉もしない、そのおおらかな人柄に惚れこみ、見習うべく口をつぐんでいる真実であった）

しばらく俊の様子が気にかかり、また下手人の対応は唐沢家に一任していたから、須賀野があれ以来姿を消していたことに、真実は考えが及ばなかった。

もう1人、谷津マリカも、様子がおかしい。

結局その場は泣いて許しを請い、その後はしばらく美術部に近づこうとしなかったマリカだったが、2学期になって、やたら真実と視線を合わせるようになってきた。

それも意図的に。

その眼が、どこことなく艶を帯びている。

夏休みを越して、色香が増す娘達も確かにいたが、（残念ながらというべきか、幸いというべきか、真実には今年の夏もそんな機会は訪れなかったが）それとは違う気がした。

そういう、色めき立つ甘美な趣が、ないのだ、マリカには。

色めく彼女たちが纏うのは、夏色の陽光の明るさ。

マリカが纏うのは、陽気が極まった向こうにできる、色濃い影。

陰惨、と言ってもいいような、暗い闇を帯びている気がする。
そんなマリカと目が合うたびに、真実は胸騒ぎを覚える。

……もう、これ以上、誰かを傷つけないで。

マリカの眼が、無残な俊の姿を思い起こさせる。

もう、何も起きないで！

祈らずにはいられない。

どうか、これ以上、怖ろしいことが、起きませんように！

……真実の祈りが、天に通じることが、なかった。

第5章 疾風の帰還者 3

3

東京駅の新幹線ホームにて。

一人の若い男性が、切符片手に右往左往していた。

「ええと、どこに並んだらいいんだ？ 何で違う目的地のと同じホームから出るんだよ……」

先程からパニックを起こして切符と次に入線する新幹線を示した電光掲示板を見比べている、どうやら新幹線に不馴れな若者を見て、世話好きそうなご婦人が、たまらず声をかけた。

「ちよっとお兄さん、どこまで行くの？」

声をかけられて救われたように振り向いた顔は、ボサボサ髪に髭ボウボウ……ご婦人は、ちよっと後悔したが、声をかけた以上仕方ないので、手助けする。

切符を見ると、自由席の特急券だった。

「ああ、これならええと、22番線の方が、後10分くらいで発車するわよ……ほら、あっちに止まってる新幹線。でも、結構並んでいるわねえ。もう一本後でよかったら、この次の……ほら、『後発』って方のラインに並んでたら、座れるわよ」

丁寧教えてくれるご婦人に謝意を示して、若者は隣のホームに移動した。

「……意外とかわいい顔してたわねえ」

人なつっこい目元が、存外整っていた。

思いがけずときめいて、ご婦人は、若者の背を見送った。

「髭を剃って、キリッとするれば、いい男なのにねえ……」

あれでは、まるで山から出てきた熊だもの。
それも忠告すべきだったと、ご婦人は再び後悔した。

うわ、確かに混んでる……。

ご婦人の言う通り、既に車内は満席だった。

別に座れなくても構わないが、通路にも人が溢れ、居場所がない。
ふと後方を見やれば、ガラガラとは言わないが席は空いている。

『指定席』――扉にはそう表示されている。

今持っている自由席特急券と乗車券は支給してもらったものだから、もし指定席券を購入するならそこは自腹となる。

正直、数百円の出費も若者には痛いところだが、預かり物の手土産や、新調した一部の機材（余分な出費を抑えたい理由が、まさにそこにある。前の仕事を終えた帰路で、重要な機材を修理不可能なまでに壊されてしまい、わずかな蓄えを根こそぎ放出したのだ）をつぶされてしまいそうな混雑に、心が揺れた。

ご婦人の忠告通り、一本後の新幹線にするべきか……いやいや、夕方までに待ち合わせの場所に着かなければならないのだ。

そうでなくても、新幹線に乗るまでにあちこち迷い、すでに予定は圧している。

発車の合図が鳴り、意を決して、彼は、指定席車両に足を踏み入れた。

どんどん指定席車両を突き進んでいくと、車掌に行きあたった。
指定席の空きを訊ねると、まだ数席空きがあり、一番近い車両の席を取ってもらえた。

機械の案内にはどぎまぎしてしまう若者だったが、人間相手ならいくらでも対応できるのだ。

番号を確認して、相席の人に会釈をしてから、ホッとして席に着く。

「どうぞ荷物を上に載せてください」

窓際の席だったので、彼を通す為に立ち上がってくれた紳士は、

荷物を抱えたまま座る青年に、そう勧めた。

お言葉に甘え、手荷物を一つ、棚に載せた

「そちらはよろしいので？」

青年が膝に大きなカバンを載せて座り込んだのを見て、紳士は尋ねる。

「あ、ちよつと精密な機械が入ってるんで、万が一落ちるとまずいんで……」

「ほお。……単なる観光旅行というわけでもなさそうですね……いや、失礼。あんまり大事に抱えていらっしゃるから、大金でも入ってるのかと」

冗談めかして笑う紳士に引き込まれるように、青年も笑顔を返した。

「当たらずとも……というところです。大事な商売道具なんで、壊れたら食いつぶされるもんで」

その素顔が、意外にも端正なことに、紳士は気が付いた。

「カメラマンなんです。まだ、全くの駆け出しなんですが」

そう言って細めた目の奥に、未来を夢見て煌めく光を、紳士は見たような気がした。

「それではお仕事、と言うわけですね。どちらへ……おっと、出すぎた質問でしたね。申し訳ない」

「いえ、構いませんよ」

笑顔で青年は、国内有数の避暑地である町の名前を口にした。

避暑地とはいえ、山紫水明、自然に恵まれた高原地帯である。

年間通して、観光客が訪れている。

とはいえ、夏休みもあらかた終わり、トップシーズンは過ぎたと言える。

秋になれば紅葉が始まり、夏ほどでないにしろ、再び観光客の足が向き始める。

だが今は、喧騒を避けて遅い夏休みを過ごす別荘族か近場の住民が、街をそぞろ歩く姿が見られる程度。

春夏秋冬オンシーズンのような観光地の、狭間に巡ってくる軽いオフシーズンと言える。

「今の時期は、あまり撮るものもないでしょうな」

地元ではないが同じ県内に住所があるという紳士は、やや首を傾げる。

「あ、本格的に仕事に入るのはまだ先なんで……今回は打ち合わせというか」

「それでも重い荷物を持って移動とは、カメラマンと言うのは大変ですな」

「あ、これは……置き場がないもんで」

「？」

「俺、まだ住む家がないもんで……ずっと日本から離れていて、先週帰国したばかりで」

「ほう。どちらにおられたんですかな？」

あ、これはまた失敬、と頭を下げる紳士に、青年は笑顔で応じ、てらいなく答えた。

「インド、です」

まさに仏様の国から来た青年にふさわしい、翳りのない清らかな笑顔だと、紳士は思った。

ムツとした熱気が、青年を包んだ。

高原の避暑地……という形容からは程遠い暑さは、空調の聞いた新幹線から降りる人間をげんなりさせる。

もったも、今まで十分な空調設備など望むべくもなかった地域を巡っていた青年にとっては、たいして苦にもならないものだった。それに、ちょっと日陰に入れば、涼しい風が吹き抜け、なんとも心地よい。

待ち合わせは、駅前のビジネスホテルのロビーに夕方6時。

まだ時間の余裕はあるからチェックインして、とりあえず必要のない荷物はフロントに預けて……。

そんな算段をつけて、ホテルのフロントに向かった。

「○○出版の長田さんの名前でお願ひしてあるんですが……」

「少々お待ちください……笹木健太様、でよろしいでしょうか？」
にこやかな笑顔で尋ねるホテルマンに、青年……健太は頷いた。

「はい」

「……少々お待ちください……伝言を承っております。遠野様より、打ち合わせを変更したいとのこととで」

「……は？」

「こちらのご住所にご案内するよう、タクシーの手配も承っておりますので、少々お待ちください」

そうホテルマンが差し出したメモを見て、健太は首を傾げる。

「すみません。地元じゃないんで分からないんですが、ここって遠いんですか？」

「はい。となりの市です。ここからですと、お車で30分ほどかと30分……タクシー代、どうでしょうか。」

健太は心の中で指折り、財布の中身を思い浮かべる。

向こうの都合なら、領収証もらっておけば後で清算してもらえらと思うが、とりあえず立て替えるにしても往復分を払うとなると、持ち合わせが、ちょっと心許ない。

考えこむ健太を窺うようにして、ホテルマンは、続けた。

「……それから本日のご宿泊はキャンセルとのことでございます」

「……はあああっ？」

「こちらのご住所のお近くに宿をお取りになられるとのこととで……」

手数料などはご心配にならないよう、お伝え下さいと承っております」

整然と告げるホテルマンに、思わずすみマセンと頭を下げながら、健太は頭の中を整理する。

携帯電話を持っていない健太と連絡を取ろうとするなら、宿泊予定のホテルに伝言を預けるのがベストだろう。

それは分かる。

ただ、あまりにも突然で、ちょっと混乱している。

オマケにわざわざキャンセル料を払ってまで宿泊先を変える必要があるだろうか？

当日キャンセルなら、宿泊代全額負担というのが、ほとんどのホテルの常識だ。

タクシー代がいくらかかるか分からないので何とも言えないが、新たに手続きしてまで浮かせたいほど高いとは思えない。

ホテルで手配してくれたタクシーに乗ったあとも、その疑問は解決しないまま、ホテルマンが言った通り30分ほどで到着した。

料金は3000円ちょっと。

「タクシー券をお預かりしてますので」

財布の中身とメーターを交互に見ながらヒヤヒヤしていた健太に、タクシーの運転手が告げた。

ほっとして、健太は目的の建物の前に立った。

やや古びた、鉄筋コンクリート造り二階建ての事務所だった。

薄暮の中に目を凝らしたが看板らしいものは見当たらない。

と言うか、そもそも灯りが点いていない。

……本当にここでもいいのかな？

不安になりながら、キョロキョロ見回し、インターホンを発見した。

恐る恐る、ボタンを押してみる。

『はい』

若い、というか、可愛らしい女性の声が応える。

「あの、〇〇出版の紹介で伺った笹木と申しますが……」
優しい女性の声にホッとして、健太は名乗った。

『あ、ちょっと待ってください……』

プツン、とインターホンが切れて、しばらくたった。
が、誰も出てこない。

「お待たせしました」

突然背後から声を掛けられ、健太はドキッとして振り向いた。

「あの……」

そこに立っていたのは、まだ高校生くらいの、少年。

夜目にも分かる、麗しい花のような、とびっきりの美少年。

「お呼び立てしてしまい申し訳ありません。叔母が……遠野が体調を崩しまして」

「……」

褐色の肌に、彫りの深い顔立ち。

それにどこか懐かしさを覚えるのは、ついこの間まで過ごしていた異邦の地の人々を思い起こさせるからか……。

……いや、違う。

もっと、遙か昔に……。

「こっちの入口は今使っていないんです。ちょっと回りますが、そっちの垣根側に出入口があるんで」

少年は先導しようとして、微動だにしない訪問者の様子に気付く。

「あの……」

訝しげに声を掛ける少年を、健太はじっと見つめる。

「笹木さ……」

「……ヤ……」

ようやく口を開いた健太の声は、強ばって上手く言葉にならない。
ゴクン、と唾を飲んで、もう一度、今度ははっきり単語を紡ぐ。

「カズヤ……?」

「……ムル？」

異国の響きを持つ名を呟く少年に、健太は……ムルガンは、満面の笑みを返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6033q/>

クマリ～生神～ 邂逅する星の宿命

2011年3月9日00時27分発行